

平成 21 年度 修士論文

青年期の対人葛藤場面における個と関係性の検討

弘前大学大学院 教育学研究科

学校教育専攻 学校教育専修 臨床心理学分野

鶴ヶ崎瑠美子

目次

第1章 問題と目的

- 第1節 はじめに
- 第2節 青年期の友人関係
- 第3節 友人関係における葛藤
- 第4節 青年期の自己
- 第5節 個・関係性での葛藤
- 第6節 自己関係づけ
- 第7節 目的

第2章 活動的側面と感情的側面からとらえた青年期の友人関係と自己の二面性の検討

- 第1節 目的
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第3章 心理臨床家からみた心理臨床場面での対人葛藤場面における個と関係性の検討

- 第1節 目的
- 第2節 方法
- 第3節 結果と考察
- 第4節 まとめ

第4章 大学生の対人葛藤場面における個と関係性の検討 【質問紙調査】

- 第1節 目的
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第5章 大学生の対人葛藤場面における個と関係性の検討 【面接調査】

- 第1節 目的
- 第2節 方法
- 第3節 結果と考察
- 第4節 まとめ

第6章 総合考察

文献

資料

1. 青年期の対人葛藤版 SCT の結果(A・B)
2. 精研式 TAT3G の結果(A・B)
3. 質問紙

第1章 問題と目的

第1節 はじめに

人は個として生を受け、個として成長していく。しかし個としてのみではなく他者と関わることで成長することもあるだろう。

桂(1975)は、児童・青年は家族によって権威・保護の人間関係を体験し、友人関係を通じて初めて自由・対等な人間関係を体験し、それに処するに必要な社会的知識・態度技術を得るようになる」と述べている。つまり、人が社会人として形成される第一段階として家庭があり、友人関係はその第二段階である。また青年期は、自分自身に対する関心が高まり、人格的共鳴や同一視をもたらすような深い人間関係を持つことを通して新たな自己概念を獲得し、健康な熟成が促進される時期でもある(西平,1973)。親からの依存関係から独立しようとする時期で、自分と対等の立場にあり、自分を支え理解してくれる相手として友人の占める役割が大きくなる(井上,1966)。このように青年期における友人関係は重要な意味を持ち、青年期において欠かすことの出来ないものである(竹中・落合,2004)。

第2節 友人関係

青年期の友人関係について、これまで相互理解・精神的結びつきの重要性(井上,1966 など)が繰り返し指摘されてきた。永田(1989)は、友人関係や仲間関係に期待される機能として、①自分の思い通りにならない世界の存在を知る、②自己と異なる立場の存在を知る、③自他の一致しうる解決を自分から模索する結果、これまでにない新しい視点を知る、④対立を経験したあとのより深い他者との相互作用を知る、という4点を指摘し、対等な立場ならではの葛藤を含む相互作用場面の重要性を指摘している。

一方で、最近、青年期の友人関係の持ち方が変化していることが指摘されている。青年の自己に関する関心の低下(西平,1988)、内面的な関わりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向(岡田,1995)が指摘され、さらに岡田(1999)は、青年期の友人関係には「表面的—内面的関係」・「群れ関係」・「気遣い関係」という3因子があることを見出している。このように最近の青年期の友人関係について、自己と他者に希薄な青年のあり様が指摘され続けている。また上野・上瀬・福富・松井(1994)は、青年期の友人関係を『心理的距離』と『同調』という観点から「独立群」、「個別群」、「表面群」、「密着群」の4パターンの交友関係を明らかにしている。落合・長沼(1998)は「深い(積極的関与)—浅い(防衛的関与)」を両極とする『友達との付き合いの深さ』と、「密着—親密—分離」という関係の持ち方の『相手との心理的接近の仕方』という二次元の心理的要因を見出し、これらを青年期の友人関係を理解する上では重要な欠かせない心理的要因であると位置づけた。青年期の友人関係に対し、希薄さや表面さだけでなく、対人関係の距離に関する研究も進められている。

第3節 友人関係における葛藤

畠山(2003)は、青年期の友人関係のルールに関する研究において、質問紙調査の結果、友人関係のルールには「親密さ」「自己呈示」「葛藤回避」があることを明らかにしている。平井(2000)は、自己と他者のうちどちらか一方を優先させなければならない事態における両者の調整プロセスに着目した結果、友人に対しては深刻度が中程度以上の状況では、自分よりも友人を優先させるものが多く、より葛藤が多いと推察している。青年期の友人関係では、自分を呈示し、友人と親密な関係にいる(もしくはいたいと思っている)ものの、友人との葛藤に対しては回避という方略をとり、友人を優先した対処をとるようにも思われる。また岸(1989)は、青年が自分の現実的な問題を解決するというよりは、葛藤が異なったそれぞれの場での人間関係をはじめとする現実に対峙するということから逃れ、新たな平衡の場を得たいという願いのほうが強い傾向にあるという結果から、青年は「場」の内側に入ることによって、自分が新たに傷つくことから逃れ、守られたいという願望を満たすことが必要となってきたとも指摘している。このように最近の研究では、自己を傷つけることを恐れ、葛藤を回避している友人関係の持ち方が多く報告されてきているが、しかしその一方で、最近の青年が葛藤を回避しつつもそれを必ずしも感じていないわけではない様子もうかがえる。藤井(2001)は、深い関わりを持つなかで生じる二者関係における適切な距離の取り方に関する「近づきたいー離れたたい」という葛藤である「山アラシ・ジレンマ」が、現代では、深い関わりに入る前の段階で生じていることを示唆した。いいかえれば、互いの棘の痛みや寒さを予期してトラブルを回避することで、関係を継続するための適度な心理的距離を保とうとしてジレンマが生じていると考えられる。現代の山アラシ・ジレンマは「近づきたいー離れたたい」といったジレンマではなく、近づきすぎたくない、離れすぎたくない、といった心理的距離の適切さにより敏感なジレンマで、「近づきたいー近づきすぎたくない」、「離れたたいー離れすぎたくない」といったような大きく2つのジレンマに分かれていることが特徴である。

第4節 青年期の自己

青年期は自分自身を見つめようとする時期でもある。人の心は、内的な変容のみでなく、人と人とのかかわりの中で発達していく面も少なくない。つまり人は、それぞれの固有の世界を持つ個的な存在でありながら、同時に他者とのかかわりなしに生きていくことの出来ない関係的存在である(岡本,1997)。この個の確立と関係性という視点から、山本(1989)は「分離した自己(Separated-Self:SS)」と「関係的自己(Connected-Self:CS)」という自己の二面性について検討し、その尺度を作成している。以下にその概念を示す。

<Connected-Self>

- 1) 愛着と共感性の発達に基礎づけられ
- 2) 他者の欲求・願望を感じ、その満足を目指す反応的行動（思いやり、世話）として表れ
- 3) 自己と他者とは互いの具体的な関係の中に埋没し拘束され責任をおう存在として把握される。

<Separated-Self>

- 1) 分離－固体化の発達に基礎付けられ
- 2) 他者の反応や外的統制によらない、自律的行動（積極的自己実現・力の発揮）として表れ
- 3) 他者は自己と同等の互いに不可侵の権利を持った存在として、抽象的一般的に把握される。

岡本(1997)は、この2つのテーマとしてSSには「自分は何者であるか」、「自分は何になるのか」という個の自立・確立を、CSには「自分は誰のために存在するのか」、「自分は誰の役に立つのか」という他者の成長・援助を挙げている。このことから、SSを自己の内面に生じたものに焦点化して自己を考えているものとして、CSを他者からの期待・要求から自分自身について考えているものとして捉えることもできよう。岸(1989)は、『(西洋人は)確立された自我が、新たに他と関係を結ぶことになる。それに対して我々日本人は、確立された、個々の自我が、関係を結ぶあり方ではなく、まず何よりも、「全体としての場」が先に形成され、その場の平衡状態をいかに保つかということが、重要となっている。それは父性原理に基づく西洋社会の「個の理論」に対して、「場の理論」として説明される。個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与える「個の理論」に対して、与えられた「場」の平衡状態の維持に、最も高倫理性を与えているのである』としている。特に、日本人のアイデンティティ発達を考える際には、個の発達のみならず、場の平衡状態を志向することからくる関係的自己を考えることは有用であると思われる。藤井(2004)は、現代に特徴的な山アラシ・ジレンマを検討する際に「個」あるいは「関係」は別々に扱うのではなく、個を通して関係を、関係を通して個を見つめていくことが非常に重要な意味を持つことを強調している。この現代に特徴的なジレンマと個と関係性についての見解は、以前から小此木(1980)も指摘していたことでもある。山アラシ・ジレンマが心理的距離をとるという認知的側面をも有していることから、「個」と「関係性」の両方が発達し、内省する力があってこそ、自他について考えることも増し、ジレンマが深まっていくこともあろうし、ジレンマ解消への糸口につながることも考えられよう。

第5節 個・関係性での葛藤

「個」や「関係性」という視点から葛藤をみると、平井(2005)は、人の心の適応にとって重要な課題として重要な他者と良好な関係を維持することと独立した個人として自分らしく生きることを挙げている一方で自己と他者は互いに対立や葛藤をすることに着目し、状況によって自己－他者間の調整の検討が必要になると指摘する。吉岡(2007)も、人は「適切な役割を演じること」と「自分自身であること」の間に本質的なジレンマがあるとし、青年が対人関係上の葛藤を抱きやすい友人関係において、「自分自身であること」をどのように感じているか、友人関係において「自己のあり方をめぐる葛藤」がどのような状況で起こっているのかについての研究を行った。その結果、葛藤の背景として個を志向することで関係を壊してしまうのではないかという懸念、相手が自分をどう思うかということへの懸念、自分への評価がマイナスになってしまう不安を抱えていることを見出した。両者のいう「重要な他者と良好な関係を維持すること」「適切な役割を演じること」は他者との関係における自己のあり方を示しているとも考えられ、また「独立した個人として自分らしく生きること」「自分自身であること」は確立した個としての自己のあり方を示しているとも考えられる。この意味において、関係的自己と分離した自己は本質的に葛藤を抱える可能性の高いものであり、その葛藤から友人関係を見た場合、谷(1997)も述べているように、現実には関係的自己を志向して行動しながらも、理想としては個を志向しての葛藤が生じ、不安が喚起されることも考えられる。Ohbuchi & Takahashi(1994)は、日本人被験者の報告した葛藤事例の約半数において葛藤が潜在化されてしまい、採用される葛藤方略の大半が回避方略であるとしている。葛藤は日本人において顕在化されにくいものであるが、たとえジレンマを生起したとしても、相手にどう思われるか不安に思い、その不安から葛藤を回避するよう行動するともとれるであろう。このような観点から見ると、最近指摘されている友人関係の持ち方の変化の理解にもつながると思われる。またこのような葛藤のプロセスを辿ることで小此木(1981)のいう、現代人の「個」の生き方、新しい自我のあり方を見つけることにも繋がるのではないだろうか。

第6節 自己関係づけ

私たちは、他者の何でもない行動やしぐさをどのように受け取るだろうか。何も感じない人があるかもしれないし、何か失敗した後なら、自分に向けられた行動ととる人もいるかもしれない。丹野・石垣・杉浦(1997)らは、後者の、自分に向けられた行動ととるような被害妄想的な体験頻度は健常大学生でも少なくないことを指摘している。金子(1999)は、他者の何でもない行動やしぐさを自分に向けられたものと感じ、自分に関連づけて物事を被害的に判断することを被害妄想的心性としてとらえ、大学生を対象とし、質問紙調査により検討している。その結果、「自己関係づけ」と「猜疑心」という2因子を抽出した。「自己関係づけ」は公的自己意識との関連が、「猜疑心」は私的自己意識との関連が見出された。

この研究を受け金子(2000)は、特に自己関係づけに焦点を当てて高校生・大学生を対象に発達の観点から検討した結果、高校生に比べて大学生が自己関係づけの傾向が高いことを見出した。このような自己関係づけが健常の青年にとって珍しいものではないのであれば、青年が自己を捉え、友人と付き合う上でどのように関わるのであろうか。また、自己関係づけは他者とのかかわりの中で、自分自身を被害的に捉えるために生じると考えられ、公的自己意識との関連のみならず、他者との関係の中で自分自身をどのように捉えているのかについても考慮する必要があると思われる。また、自己を否定的に捉えているために、青年が友人と向き合えずに、葛藤場面を回避している場合も考えられよう。

第7節 目的

まず友人関係が自己に与える影響を検討する。次に第3章で、心理臨床家からみた臨床場面における対人葛藤場面での自己を検討する。友人関係におけるジレンマ解消は、自分の意見を通すか、相手の意見に従うか、互いに話し合うか、いずれにせよ人に、特に多様な友人関係の中で自己にあり様に目を向け始める青年に大きな負担をもたらすものであろう。しかし他者と共にある以上、避けては通れない道でもあると考える。本研究では、青年期の友人葛藤の中で、特に山アラシ・ジレンマに注目し、CS・SSがどのように調整されていくのか、調整の結果がどのような対人行動を引き起こすのか、さらにはジレンマへの対処にはどのように結びつくのかについて、探索的に検討を行うことを目的とする。

第2章 活動的側面と感情的側面からとらえた友人関係における個と関係性の検討

第1節 目的

青年期における対人関係の1つである友人関係は、重要とされている一方で、最近では友人関係の持ち方の変化も指摘されている。この青年期の友人関係を、活動的側面と感情的側面という二方面からのアプローチによって構造的に明らかとすること、また友人関係を通して、個人の個としてのあり方(SS)と関係の中でのあり方(CS)に関連を持つと考えられる。本章では、このような青年期における友人関係の活動的側面と感情的側面の特徴と自己の二面性(CS・SS)の関係を検討することで、友人関係が自己の位置づけにどのような関連を持つのかを質問紙調査にて探ることを目的とする。

第2節 方法

被調査者：2007年10月、青森県内の大学生を対象に、心理学関連の授業時に質問紙調査を行った。回答者は131名（男性62名、女性69名）で、平均年齢は19.06歳（ $SD=.71$ ）であった。

調査内容：【友人関係に関する尺度】榎本(1999)が作成した、友人関係に関する活動的側面尺度(29項目)と感情的側面尺度(25項目)とを用い、両尺度に「1. 全くあてはまらない」から「6. 非常にあてはまる」の6件法での回答を求めた。

【自己の二面性に関する尺度】山本(1989)が作成したC尺度(19項目)、S尺度(12項目)を用い、両尺度に「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

分析方法：友人関係に関する活動的側面尺度と感情的側面尺度、自己の二面性尺度の3尺度それぞれについて、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行なった。抽出された各因子に.40以上の因子負荷を示す項目を各因子を構成する項目とし、各因子ごとのそれらの項目群の合計得点を算出するために、 α 係数の検討を行った。

次に、活動的側面尺度と感情的側面尺度との各因子の項目群合計得点から、各々の中央値を境に高群と低群に分けた。さらに、この両尺度の各因子を要因として組合せ、CSとSSの程度について2要因の分散分析を行なった。

第3節 結果

3-1. 各尺度の因子分析

1) 友人関係に関する活動的側面尺度の因子分析

活動的側面尺度全29項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、5項目(例：「交換日記をする」、「一緒に習い事をする」等)にこれらの効果が認められ、項目の内容を検討したところ、大学生に妥当ではないと判断して分析から除外することとした。また、1回目の因子分析の際に榎本の「閉鎖的活動」の因子に高負荷を持つ項目が2項目のみであったため、この項目も除外し、計22項目についての因子分析を再度行った。

表 1 活動的側面の因子分析結果と各因子を構成する項目群の α 係数、平均値（標準偏差）

項目（数字は質問紙での項目番号）	因子			h^2
	1 相互理解 活動	2 親密確認 活動	3 共有活動	
38 自分の性格や行動についての話をする	.785	.194	-.023	.654
37 将来についての話をする	.747	.005	.156	.583
64 お互いの欠点や長所の話をする	.719	.168	.166	.572
18 これからの生き方や人生観などについての話をする	.671	-.089	.218	.506
29 喜びや悲しみを分かち合う	.491	.318	.340	.458
46 お互いに不満に思っている点を言い合う	.386	.196	.318	.289
28 自分の趣味についての話をする	.380	.319	.331	.357
52 トイレに一緒に行く	.049	.621	.045	.390
50 教室を移動するときは一緒に行く	-.032	.614	.013	.378
5 一緒に登下校する	.146	.485	.329	.365
70 好きなタレントや歌手の話をする	.344	.431	.164	.330
66 一緒にゲームセンターに行く	.178	.415	.124	.220
15 何となく家に集まって時を過ごす	.258	.401	.227	.279
60 一緒に勉強する	.109	.357	.181	.172
27 テレビ番組の話をする	.290	.347	.278	.282
35 部屋の中でファミコンやゲームをする	-.104	.159	-.036	.037
16 外で遊ぶ	.108	-.055	.607	.384
17 休日に出掛ける	.006	.033	.516	.268
22 一緒にスポーツをする	.162	.193	.475	.289
31 お互いの家で一緒に遊ぶ	.303	.385	.451	.443
45 意見が違うときに納得するまで話し合う	.190	.155	.362	.191
39 自転車に乗ってぶらぶらする	.111	.209	.253	.120
固有値	3.20	2.36	2.00	
累積寄与率	14.56	25.29	34.39	
α 係数	.834	.700	.621	
平均値	3.95	3.26	3.76	
(SD)	(1.00)	(.97)	(.96)	

榎本(1998)の因子を参考に第3因子まで(固有値 ≥ 1.53)を採択した(表1)。第1因子は「自分の性格や行動についての話をする」、「将来についての話をする」、「お互いの欠点や長所の話をする」が高負荷を示し、自己の内面についての話をしたり、それを相互に理解しようとする活動であることから「相互理解活動」と命名した。第2因子は「トイレに一緒に行く」、「教室を移動するときは一緒に行く」、「一緒に登下校する」などが高負荷を示し、友人との共行動で仲のよさを確認しようとする活動であることから「親密確認活動」と命名した。第3因子は「外で遊ぶ」、「休日に出掛ける」、「一緒にスポーツをする」などが高負荷を示し、友人との遊び等の付き合いを示していることから「共有活動」と命名した。なお、因子負荷量.40以上の項目を各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。各 α 係数は、.621~.834を示し、若干低い値もあるが、各因子を構成する項目を下位尺度として用いるのにほぼ満足できるものと判断した。

2)友人関係に関する感情的側面尺度の因子分析

感情的側面尺度全25項目(全項目で天井効果、フロア効果は認められなかった)についての因子分析を行った。榎本(1999)を参考に、第5因子まで(固有値 ≥ 1.29)を採択した(表2)。第1因子は「自分が友達にどう思われているか気になる」、「自分が本当に友達と思われているか気になる」、「友達に裏切られているのではと思う」などが高負荷を示し、友人関係における不安や不信感、寂しさなどの否定的な感情と考えられることから「不安・不信」と命名した。第2因子は「友達とは気持ちが通いあっている」、「心から友達を親友といえる」、「友達は私のことならだいたい知っている」などが高負荷を示し、それに加え「友達のやっていることに引きずりこまれて困る」という項目もあることから、友人との間で安心感を得ていることに加え、共にいることでの巻き込まれ感情も含まれるということから「一体感」と命名した。第3因子は「友達と違う意見でも自分の意見はきちんという」、「友達と意見が対立しても自分をなくさないでいられる」、「友達と一緒にいても自分の意思で行動している」などが高負荷を示し、友達と自分の意見・行動は別物としている点を強調し「独立」と命名した。第4因子は「友達は私を絶対裏切らないと思う」、「友達とはだいたい意見が合う」、「友達を信頼している」などが高負荷を示し、友人への信頼感を示すものであることから「信頼」と命名した。第5因子は「友達のほうがテストの点がいいと不安になる」、「友達には様々な点で負けたくない」、「友達よりいい学校に行きたい(いい仕事につきたい)」の3項目で、友人よりも勝っていたい感情という点から「ライバル」と命名した。なお、因子負荷量.40以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。その結果、「ライバル」の α 係数が.51と低いため以後の分析から除外することとした。また「独立」を構成する項目が活動的側面にも関連すると考えられるため、この因子もまた以後の分析から除外することとした。それ以外の各因子を構成する項目は、下位尺度として適切であると判断した。

表 2 感情的側面の因子分析結果と各因子を構成する項目群の α 係数、平均値（標準偏差）

項目（数字は質問紙での項目番号）	因子					h^2
	1	2	3	4	5	
	不安・不信	一体感	独立	信頼	ライバル	
14 自分が友達にどう思われているか気になる	.826	-.019	-.002	.064	.110	.698
59 自分が本当に友達と思われているか気になる	.680	-.276	-.183	.021	-.050	.575
8 友達に裏切られているのではと思う	.630	.006	-.019	-.328	-.037	.507
41 友達の考えていることがわからなくなつて不安になる	.589	-.077	-.124	-.089	.375	.517
68 友達が自分の知らない友達と話しているのを見て寂しさを感じる	.571	.109	-.118	-.034	.162	.379
36 友達に「仲間はずれにされた」と感じることもある	.563	.113	-.063	-.282	.293	.499
67 友達と意見が違うと不安になる	.435	.223	-.352	.243	.319	.523
33 自分の思っていることを友達に言えない	.434	-.278	-.416	-.062	.359	.572
51 友達の誘いを断れず困る	.331	.267	-.315	-.050	.260	.349
40 友達とは気持ちが通いあっている	.150	.680	.036	.327	-.064	.597
23 心から友達を親友と言える	-.046	.625	-.120	.441	-.169	.630
44 友達は私のことならだいたい知っている	-.108	.621	-.034	.272	.136	.491
63 自分は友達に充分受け入れられていると思う	.040	.612	.343	.351	-.044	.619
56 友達の考えていることはだいたいわかる	-.075	.507	.082	.049	.133	.289
69 友達のやっていることに引きずりこまれて困る	.305	.421	-.353	-.141	.188	.450
53 友達と違う意見でも自分の意見はきちんとという	.008	.188	.837	.107	-.120	.761
20 友達と意見が対立しても自分をなくさないでいられる	-.214	-.081	.713	-.208	.154	.627
32 友達と一緒にいても自分の意志で行動している	-.242	.033	.417	.143	.169	.283
58 友達は私を絶対裏切らないと思う	-.08	.306	-.060	.638	-.141	.531
2 友達とはだいたい意見が合う	-.114	.165	-.054	.590	.112	.403
1 友達を信頼している	-.029	.337	-.061	.573	-.094	.455
11 友達の方がテストの点がいいと不安になる	.221	.132	-.083	-.115	.528	.365
21 友達には様々な点で負けたくない	.125	.015	.282	-.029	.414	.269
34 友達よりいい学校に行きたい(いい仕事につきたい)	.029	.017	.033	.031	.412	.173
13 友達といると自分のやりたいことができない	.221	-.099	-.212	-.353	.358	.357
固有値	3.39	2.66	2.25	2.09	1.53	
累積寄与率	13.57	24.20	33.22	41.56	47.68	
α 係数	.842	.765	.719	.756	.505	
平均値	3.12	3.51	4.00	4.14	3.23	
(SD)	(.93)	(.80)	(.89)	(.87)	(.97)	

3) 自己の二面性尺度の因子分析

自己の二面性尺度 31 項目について天井効果とフロア効果について検討した。その結果、4 項目(「8.他の人の気持ちには関心がない」「9.人を傷つけるようなことをしたのではないかと、ひどく気がとがめることがある」等)にこれらの効果が認められたため分析から除外することとし、計 27 項目についての因子分析を行なった。山本(1989)を参考に、第 2 因子まで(固有値 ≥ 4.10)を採択した(表 3)。第 1 因子は「人に尽くすことに喜びを感じる」、「苦勞している人をみると同情せずにはいられない」や逆転項目の「悲しんでいる人をみてもあまりピンとこないことが多い」などが高負荷を示し、他者への共感・心配りや他者の期待に沿うように自分の行動を決めていることを示す因子であると考えられた。また、この因子に高負荷を持つ項目は、山本(1989)における「自己」の **Connected** な側面に該当する項目とほとんど一致することから、「CS」と命名した。第 2 因子は一連の逆転項目である「人から非難されると非常にこたえる」、「自分の意見をはっきりいうのにためらいを感じるが多い」、「一度決めたことでも、人から言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう」など山本(1989)における「自己」の **Separated** な側面が高負荷を示し、他者と自分は別の存在であって自分の行動・価値は自分自身で決めていることを意味する因子と考えられることから、「SS」と命名した。なお、因子負荷量.40 以上の項目を各因子を構成する項目とし、それら各項目群の α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。各 α 係数は、.821 及び.791 と満足できる値であり、各因子を構成する項目を下位尺度として用いるのに適切と判断した。

表 3 自己の二面性の因子分析結果と各因子を構成する項目群の α 係数、平均値（標準偏差）

項目（数字は質問紙での項目番号）	因子		h^2
	1 CS	2 SS	
7 悲しんでいる人をみてもあまりピンとこないことが多い *	-.698	.233	.542
31 人に尽くすことに喜びを感じる	.698	.124	.502
30 苦労している人を見ると同情せずにはいられない	.680	.167	.490
14 他人のことには自分のことほど一生懸命になれない *	-.559	.041	.314
21 人の気持ちには敏感な方だ	.554	-.116	.320
24 他人のことでも見てみぬふりをしておくことができない	.553	-.158	.331
15 周囲の人々の幸せが私の幸せだ	.503	.114	.266
19 自分が何かやろうとする前には必ず他の人の気持ちを考える	.492	.088	.250
16 周囲の人の期待にはなるべく応えようとしている	.467	.345	.337
1 人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある	.417	.045	.176
26 周りの人と協調していくことができる	.305	-.002	.093
6 周囲の人の存在をじゃまだと感じることがある *	-.276	.185	.110
25 日常のささいな出来事や人間関係に、あまり心をわずらわされることはない	-.265	-.238	.127
10 自分の個性や能力を生かそうと努めている	.250	-.199	.102
11 自分の周囲には、心を許しあえる人がほとんどいない *	-.240	.000	.058
29 人から非難されると非常にこたえる *	.270	.648	.492
28 自分の意見をはっきり言うのにためらいを感じる人が多い *	.195	.645	.454
4 一度決めたことでも人から何か言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう *	.058	.584	.344
22 自分のことでも人から「こうしなさい」と言われたほうが楽だ *	-.009	.542	.294
20 自分の権利をはっきりと主張する	.131	-.539	.307
2 人にどう思われるかということはあまり気にしない	-.319	-.520	.372
5 正しいと思うことは人には構わず実行する	-.004	-.468	.219
17 自分の身边に閉じこもらず社会、世界という広い視野を持とうとしている	.394	-.462	.369
23 人の気持ちを察することは苦手だ *	-.305	.441	.288
18 納得できないことには妥協しない方だ	.174	-.436	.221
27 自分の本当にやりたいことがよく解らない *	-.201	.326	.147
3 その場の雰囲気や人の気持ちを考え、言いたいことを言わずにおくことがよくある *	.060	.284	.084
固有値	4.16	3.44	
累積寄与率	15.42	28.18	
α 係数	.821	.791	
平均値 (SD)	2.77(.53)	2.49(.53)	

※ *は逆転項目を示す。

3-2. 友人関係と自己の二面性(CS・SS)との関連

友人関係因子の下位尺度得点の中央に位置する値で被験者を得点の高い群（以下 H 群）と得点の低い群（以下 L 群）に分け、「活動的側面（「相互理解活動」、「親密確認活動」、「共有行動」）」と「感情的側面（「不安・不信」、「一体感」、「信頼」）」との因子の組み合わせ計 9 組ごとに CS・SS を従属変数として、その程度について 2 要因の分散分析を行なった。

1) 関係的自己 (CS) の程度について

CS における分散分析の結果(図 1 参照)、「相互理解活動—不安・不信」で交互作用の有意傾向が認められた ($F(1,127)=3.36, p<.10$)。交互作用について単純主効果の検定（以下全ての多重比較には Bonferroni 法を用いた）を行った結果、「不安・不信」の両群において「相互理解活動」の単純主効果が有意及び有意傾向 ($F(1,127)=28.00, p<.001$; $F(1,127)=2.95, p<.10$) であり、多重比較の結果、不安・不信の高低者ともに相互理解活動を行なわない者より行う者の方が CS 得点が高かった。「相互理解活動」の L 群における「不安・不信」の単純主効果が有意 ($F(1,127)=3.69, p<.05$) であり、相互理解活動を行わない者は不安・不信の低い者よりも高い者の方が CS 得点が高かった。

また主効果は「相互理解活動」($F(1,127)=20.79, p<.001$; $F(1,127)=14.87, p<.001$; $F(1,127)=14.25, p<.001$)、「親密理解活動」($F(1,127)=8.84, p<.05$; $F(1,127)=5.74, p<.05$; $F(1,127)=4.56, p<.05$)、「共有活動」($F(1,127)=11.44, p<.001$; $F(1,127)=8.13, p<.01$; $F(1,127)=10.56, p<.001$) と全ての「活動的側面」で有意であり、多重比較の結果、どの感情的側面との組合せにおいても活動的側面 H 群のほうが活動的側面 L 群より CS 得点が高かった。また、「一体感」でも主効果に有意及び有意傾向 ($F(1,127)=3.89, p<.10$; $F(1,127)=3.98, p<.05$; $F(1,127)=3.50, p<.10$) が認められ、多重比較の結果、感情的側面のひとつである「一体感」H 群のほうが同 L 群よりどの活動的側面との組合せにおいても CS 得点が高かった。

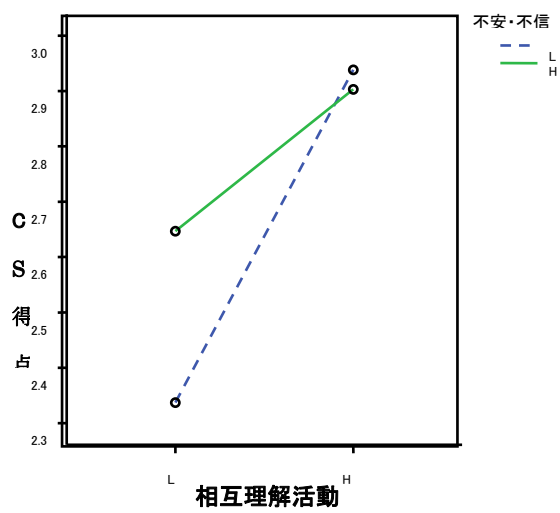


図 1 各群の CS 得点

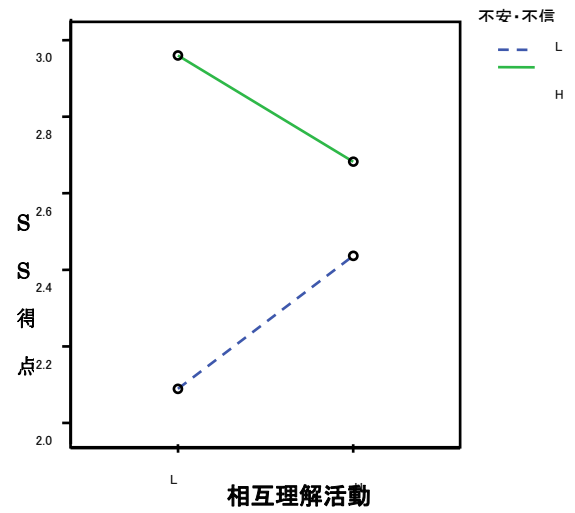


図 2 各群の SS 得点

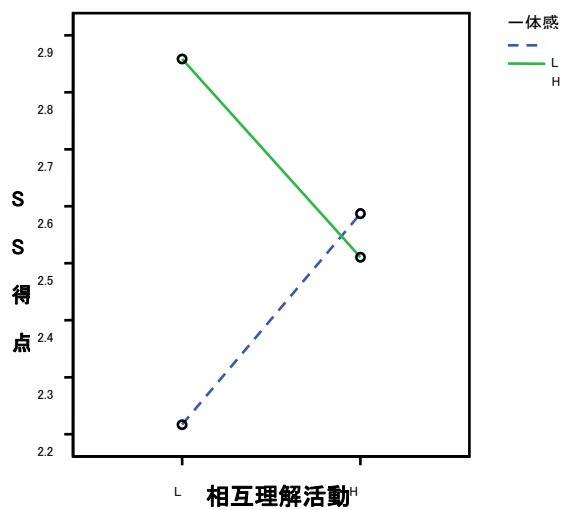


図 3 各群の SS 得点

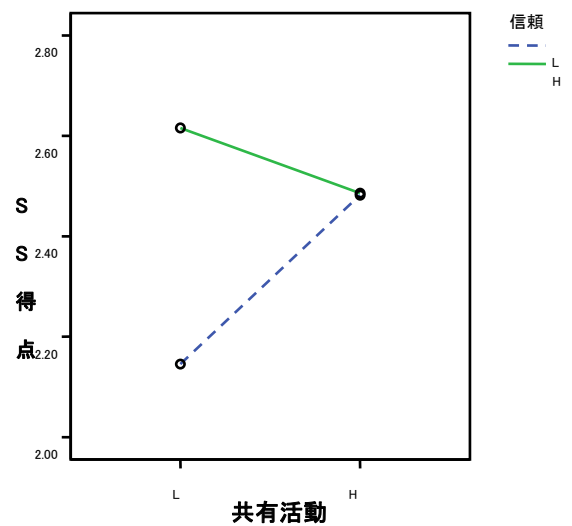


図 4 各群の SS 得点

2)分離した自己 (SS) の程度について

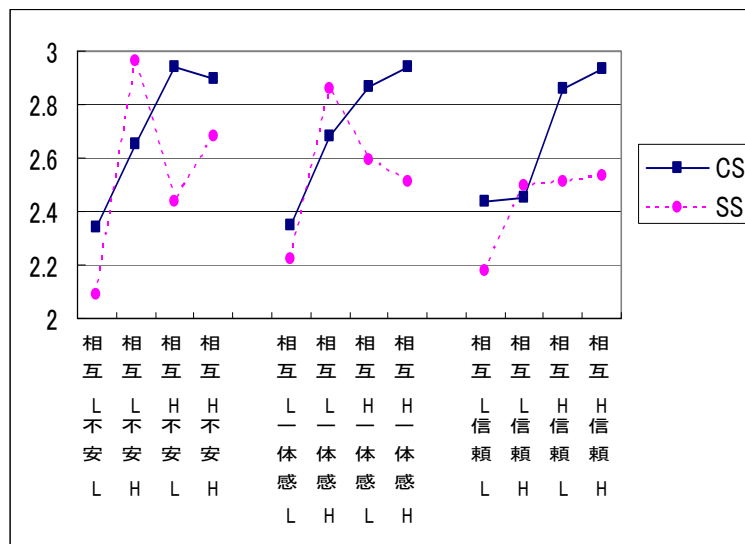
SSにおける分散分析の結果、「相互理解活動—不安・不信」(図2参照)、「相互理解活動—一体感」(図3参照)で有意な交互作用($F(1,127)=11.70, p<.001$; $F(1,127)=11.32, p<.001$)が、「共有活動—信頼」(図4参照)で交互作用の有意傾向($F(1,127)=3.46, p<.10$)が認められた。有意及び有意傾向であった交互作用について単純主効果の検定を行った結果、「相互理解活動—不安・不信」では「不安・不信」の両群において「相互理解活動」の単純主効果が有意及び有意傾向($F(1,127)=9.90, p<.01$; $F(1,127)=3.63, p<.10$)であり、多重比較の結果、不安・不信の高い者は相互理解活動を行わない者よりも行なう者の方がSS得点が低く、不安・不信の低い者は相互理解活動を行わない者よりも行なう者のほうがSS得点が高かった。「相互理解活動」の両群において「不安・不信」の単純主効果が有意($F(1,127)=33.14, p<.001$; $F(1,127)=5.76, p<.05$)であり、多重比較の結果、相互理解活動の高低ともに不安・不信の低い者よりも高い者のほうがSS得点が高かった。一方、「相互理解活動—一体感」では「一体感」の両群において「相互理解活動」の単純主効果が有意及び有意傾向($F(1,127)=6.87, p<.10$; $F(1,127)=4.73, p<.05$)であり、多重比較の結果、一体感の高い者は相互理解活動を行わない者よりも行なう者のほうがSS得点が低く、一体感の低い者は相互理解活動を行わない者よりも行なう者の方がSS得点が高かった。「相互理解活動」のL群において「一体感」の単純主効果が有意($F(1,127)=13.58, p<.001$)であり、多重比較の結果、相互理解活動を行わない者は一体感が低い者よりも高い者の方がSS得点が高かった。さらに、「共有活動—信頼」では「共有活動」のL群において「信頼」の単純主効果が有意($F(1,127)=6.51, p<.05$)であり、多重比較の結果、共有活動を行わない者は信頼が低い者よりも高い者の方がSS得点が高かった。

また、活動的側面での主効果は「親密確認活動」で全ての感情的側面との組合せにおいて有意及び有意傾向であり($F(1,127)=3.73, p<.10$; $F(1,127)=5.91, p<.05$; $F(1,127)=8.84, p<.01$)、「親密確認活動」のH群のほうがL群よりSS得点が高かった。感情的側面での主効果は、「不安・不信」で「親密確認活動」・「共有活動」において有意であり、($F(1,127)=20.62, p<.001$; $F(1,127)=25.42, p<.001$)、「不安・不信」H群のほうが同L群よりどちらの活動的側面との組合せにおいてもSS得点が高かった。「一体感」では、「共有活動」で有意であり($F(1,127)=.45, n.s.$; $F(1,127)=6.65, p<.05$)、H群のほうがL群よりもSS得点が高かった。「信頼」でも、「共有活動」で有意であり($F(1,127)=1.38, n.s.$; $F(1,127)=1.39, n.s.$; $F(1,127)=3.58, p<.10$)、H群のほうがL群よりもSS得点が高かった。

以上のことから、CSは主に「活動的側面」の因子で主効果が認められ、それは一様に友人関係の活動的側面が活性化した際にCSが高まるという結果であった。SSは「活動的側面」と「感情的側面」との組合せで異なる結果が得られた。SSの主効果は主に「感情的側面」で認められ、有意な交互作用は「相互理解活動—不安・不信」、「相互理解活動—一体感」で認められた。この2つの組合せのときに、「活動的側面」・「感情的側面」の高低で差が認められた。また、CSとSSとで共に交互作用(有意傾向を含む)が認められた「相互理解活

動—不安・不信」を比較すると、不安高群は相互理解活動を行っているか否かによって、CSとSSとが相互に補完的関係にあることがうかがえた。また交互作用が認められた組合せでは、不安低群においてこのような補完的関係が認められたのは相互理解活動を行っている場合のみであり、相互理解活動を行っていない場合はCSもSSも低く、自己に関心が向き難いことが示唆された。

交互作用が見られなかった組合せもあるが、各組合せごとにCS得点とSS得点を概観し、比較してみよう。相互理解活動と感情的側面との組合せ(図5)では、まず「相互理解活動—不安・不信」の場合、CSとSS共に得点が低い群(相互理解活動L群と不安・不信L群)と、CSが高くなるとSSが低下しSSが高くなるとCSが低下するという相互に点を補い合っている群(相互理解活動L群と不安・不信H群、相互理解活動H群と不安・不信L群)、そして互いに得点が高い群(相互理解活動H群と不安・不信H群)が見られる。



「相互理解活動—一体感」では、CSとSS共に得点が低い群(相互理解活動L群と一体感L群)と、一体感が高くなるとCS得点とSS得点共に上昇する群がある(相互理解活動L群と一体感H群)。また、相互理解活動H群と一体感L群、相互理解活動H群と一体感H群になるにつれ、CSとSSの得点差が開き、CSのほうがSSよりも得点が高い。また「相互理解活動—不安・不信」と「相互理解活動—一体感」とを比較すると、相互理解活動L群と感情的側面L・H群との得点の推移は似ているが、相互理解活動H群の時のCSとSSの得点差が異なっている。

「相互理解活動—信頼」では、CSとSSとで得点傾向が異なる。CSは相互理解活動L群よりも同H群のほうが得点が高かった。SSは相互理解活動L群と信頼L群のときのみ値が低く、他の組合せでは中央値(2.5)にあり、得点の変化はみられなかった。

親密確認活動と感情的側面との組合せ(図 6)では、まず「親密確認活動－不安・不信」で、「相互理解活動－不安・不信」と同様の CS と SS の変化がみられている。CS と SS 共に得点が低い群(親密確認活動 L 群と不安・不信 L 群)と、CS が高くなると SS が低下し SS が高くなると CS が低下するという相互に点を補い合っている群(親密確認活動 L 群と不安・不信 H 群、親密確認活動 H 群と不安・不信 L 群)、そして互いに得点が高いが SS よりも CS のほうが得点が高い群(親密確認活動 H 群と不安・不信 H 群)が見られる。

「親密確認活動－一体感」と「親密確認活動－信頼」では CS と SS が共に平行して得点が上昇傾向にある。その中でも CS のほうが SS よりも得点が高く、特に活動的側面が活性化されたときに高い値となっている。

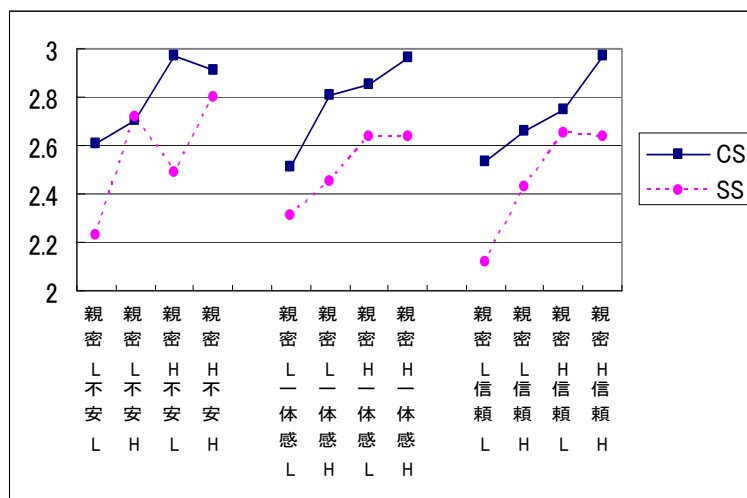


図 6 親密確認活動と各感情における群の CS・SS 得点

共有活動と感情的側面との組合せ(図 7)では、まず「共有活動－不安・不信」では先にも述べたが、「相互理解活動－不安・不信」と同様の CS と SS の変化がみられている。CS と SS 共に得点が低い群(共有活動 L 群と不安・不信 L 群)と、CS が高くなると SS が低下し SS が高くなると CS が低下するという相互に点を補い合っている群(共有活動 L 群と不安・不信 H 群、共有活動 H 群と不安・不信 L 群)、そして互いに得点が高いが SS よりも CS のほうが得点が高い群(共有 H 群と不安・不信 H 群)が見られる。

「共有活動－一体感」では、SS が「共有活動－不安・不信」と同様の推移を呈しているが、CS の方は「親密確認活動－信頼」とほぼ同様の傾向を示している。

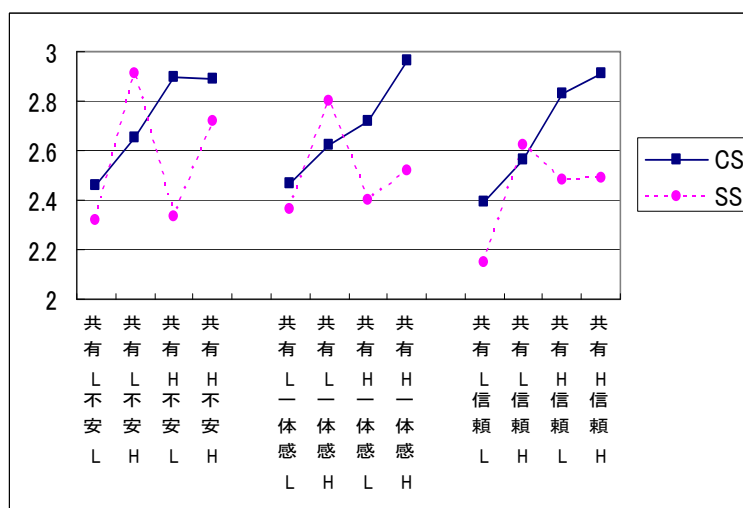


図 7 共有活動と各感情における群の CS・SS 得点

「共有活動－信頼」は「相互理解活動－信頼」と同様の傾向を示しており、CS は共有活動 L 群よりも同 H 群のほうが得点が高かった。SS は共有活動 L 群と信頼 L 群のときのみ値が低く、他の組合せでは中央値(2.5)にあり、得点の変化はあまりみられなかった。

以上のことから、組み合わせによって CS と SS が補完的な関係になっているもの(「相互理解活動－不安・不信」、「相互理解活動－一体感」、「共有活動－不安・不信」、「共有活動－一体感」と、CS と SS の得点が共に上昇傾向にあるもの(「親密確認活動－一体感」、「親密確認活動－信頼」)とが示唆された。また、組合せに関係なく CS は活動が促進されると活性化しており、活動 H 群と感情 H 群のどの組合せでも SS より得点が高かった。また SS は相互理解活動と共有活動の場合、活動 L 群と感情 H 群のときに CS よりも得点が高く、活動よりも感情が高い場合に活性化されていた。

第 4 節 考察

友人関係尺度で因子分析を行なった結果、活動的側面では「相互理解活動」、「親密確認活動」、「共有行動」が、感情的側面では「不安・不信」、「一体感」、「信頼」が抽出された。榎本(1999)の研究では中学生・高校生・大学生の被回答者をコミにして因子分析がなされていたが、本研究では大学生のみを対象として因子分析を行なった。その結果、ほとんどの因子が榎本(1999)の研究と類似していると考えられるものであった。しかし「一体感」においては少し異なる結果が得られた。「一体感」は榎本(1999)の研究では「安心・信頼」が基盤となっているが、本研究では「友達のやっていることに引きずり込まれて困る」といった他者といることでの巻き込まれ感情を含むものとなった。この結果から感情的側面での自己と他者が共にある「一体感」において、大学生では自分が他者に巻き込まれているかもしれないという疑問や葛藤を抱きながらも安心できる人物を相互に受け入れて安心感を得ていることが示唆された。一方、自己の二面性に関する尺度を因子分析した結果、山本(1989)の研究とほぼ同様の 2 因子である「CS」と「SS」が抽出された。「CS」は、他者への共感・心配りや他者の期待に沿うように自分の行動を決めていることを示す因子であり、他者からの期待・要求から自分自身について考えることといえるであろう。「SS」は他者と自分は別の存在であって、自分の行動・価値は自分自身で決めていることを意味する因子であり、自己の内面に生じたものに焦点化して自己を考えていることといえるであろう。

この CS と SS を従属変数とし、友人関係に関する活動的側面と感情的側面の因子の組合せごとに 2 要因の分散分析を行なった。その結果、他者との関係の中でのアイデンティティである CS は、友人関係の活動的側面全般に主効果が認められた。全ての活動的側面において、H 群のほうが L 群より CS 得点が高かった。つまり CS は一般に友人関係における活動が高まることを通じて活性化されるものと考えられる。友人と活動を共に行うことで、友人からの期待・要求を通して自分自身を捉え、他者との関係における自己である CS が上昇したといえるであろう。また「一体感」でも主効果が認められ、どの組合せにおいても H

群のほうが L 群より CS 得点が高かったことから、友人関係における「一体感」が高まるにつれ、CS が活性化されるものとも考えられる。「一体感」は先にも述べたとおり、「安心・信頼」が基盤となっているが、「友達のやっていることに引きずり込まれて困る」といった他者ということでの巻き込まれ感情を含んでおり、それは感情的側面での自己と他者が共にあることをも意味している。CS は主に活動的側面で活性化されるものであるが、大学生では自分が他者に巻き込まれているかもしれないという疑問や葛藤を抱きながらも安心できる人物を相互に受け入れるという一体感でもまた活性化される。この疑問や葛藤を含んだ一体感は他者からの期待・要求ではないが、自分のみでなく友人らが相互に行なっていることから、自分からも他者からも共に感じられる感情であることから CS 得点が活性化されたと考えられる。

CS においては、「相互理解活動—不安・不信」についてのみ交互作用傾向が認められた。相互理解活動 H 群では一様に CS 得点が高く、これは CS 全般の傾向と一致する。しかし相互理解活動 L 群では不安・不信の L 群よりも H 群において、相互理解活動 H 群程ではないが CS 得点が高くなっていた。友人関係における活動的側面が低い場合でも、不安・不信といった感情的側面が高まることによって、また友人と自分の内面についての話などをしない場合に限って、対人関係を手がかりに自己を捉えようとする傾向が高まる可能性も示唆された。

他者と自分は別個の存在というアイデンティティである SS は、CS と比較して、友人関係の感情的側面の影響を受けているようである。比較的多くの感情的側面において H 群のほうが L 群よりも SS 得点が高かった。このことから、友人関係の中で生じる感情は、友人関係から自己を捉えるというよりも自分自身の状態に関心を向けることで自己を特徴づけることを促進するといえるのではないだろうか。つまり、友人といるときの自分自身の感情に注意を向けながら、その結果を自己のあり方と結び付けていると考えることが出来る。このことから「SS」は自己の内面に生じたものに焦点化して自己を捉えるものであるといえるであろう。また活動的側面では「親密確認活動」で主効果が認められ、どの組合せにおいても H 群のほうが L 群より SS 得点が高かった。親密確認活動は友人との共行動で仲のよさを確認しようとする活動であり、榎本（1999）でも親密的で友人との行動や趣味の類似点に重点を置き仲がいいことを確認するような付き合い方を示すという指摘もなされており、本質的な親密さや仲の良さから自己の特徴的なあり方と感じているというよりも、友人と共に活動を行うこと自体あるいはそのような行動をしている自分自身に意味を見だし、SS が上昇したと考えられる。

SS で有意な交互作用のみられた 2 組は、共に相互理解活動が関わっている。SS には、特に相互理解活動という活動的側面が高い場合に感情的側面からの影響が相殺される傾向があるように思われる。それは、第一に SS が極端に高い場合に相互理解活動がなされると SS を低下させるという傾向である。相互理解活動には自己開示・感情の共有などを特徴として挙げることができるが、この活動により SS で自己のあり方を位置づける必要が減じら

れ SS が下がると考えられる。また一方で上昇した CS が SS の低下分を補っているとも考えられる。第二に、SS が極端に低い場合に、相互理解活動で他者と関わることで CS が上昇し、自分自身に関心が向けられることに伴って、ある程度 SS が上がるとも考えられる。その他に友人関係における「共有活動—信頼」の組合せで、SS 得点に交互作用傾向が認められた。この場合にも、前述の相互理解活動と同様に相殺傾向が認められることが特徴であり、相互理解活動と類似の内的過程も示唆される。

CS と SS とで共に交互作用が認められた「相互理解活動—不安・不信」を比較すると、4 群中 3 群で CS と SS とが相互に補完的關係にあることが窺われた。つまり、CS と SS の一方が平均レベルよりも高くなる場合に、他方が平均レベルへと下がる関係が認められた。ただし、友人関係において相互理解活動が低く、不安・不信が低い群のみは、CS・SS いずれも共に低い値にとどまっており、加藤(1983)における同一性拡散に至る群とも推察される。しかし、この自己の二面性と加藤(1983)の ID 地位判別尺度との関連は詳細な検討がなされておらず、今後の課題ともいえる。

有意な交互作用は認められていないものもあるが、活動的側面と感情的側面の組合せごとに CS と SS の得点を比較すると、CS と SS が補完的な関係になっているもの(「相互理解活動—不安・不信」、「相互理解活動—一体感」、「共有活動—不安・不信」、「共有活動—一体感」と、CS と SS の得点が共に上昇傾向にあるもの(「親密確認活動—一体感」、「親密確認活動—信頼」))と、CS と SS の得点が共に上昇傾向にあるもの(「親密確認活動—一体感」、「親密確認活動—信頼」))とが示唆された。補完的な関係は先述したのと同様で、CS と SS の一方が平均レベルよりも高くなる場合に、他方が平均レベルへと下がる関係である。また、多くの組合せで CS と SS が低い値にとどまっている群(活動 L 群感情 L 群)、CS と SS が共に上昇している(CS>SS)群(活動 H 群感情 H 群)がみられた。特にそれは相互理解活動と共有活動で多く、これらの活動での友人関係において、共に活動をせず感情の喚起もなされない群は自己を位置づける際に SS も CS も促進されず、活動はしないが感情が喚起される場合は CS より SS で、活動するが感情が喚起されない場合は SS より CS で、最後に、活動もして感情も喚起される場合は CS・SS 共に促進されるが SS よりも CS で強く自己が位置づけられる傾向にあるといえよう。友人関係において自分を位置づける時、活動優位か感情優位かによって CS と SS とで結果が異なり、これは友人の期待に沿い行動することで自己を考える CS は「活動的側面」と関連し、友人関係において生じる自己の感じたことに焦点を向ける SS は「感情的側面」と関連しているという仮説を支持しているものとも考えられる。しかしこれらが相互に関連をもち補完的な関係にあるということについては、今後より詳細な検討が求められるであろう。また、親密確認活動では CS と SS とが共に上昇傾向にある結果が得られた。CS が他者への気配り・共感、他者の期待に沿うよう行動しているという特徴を持ち、SS が自分と他者は別の存在であって自分の行動が自分で決めているという特徴を持ち、その 2 つがどちらも活性化される活動として親密確認活動がなされているとも考えられる。親密確認活動は友人との共行動という活動的側面と、共に活動する中で他者への気配りや考えていることを感じるという感情的側面を兼ね備えている

ともいえるかもしれない。

大学生の友人関係が活動的側面と感情的側面とで矛盾が生じるような時、例えば大学生自身は友達と一緒に過ごしているが不安を感じている時、自分自身についてはどのように捉えているのだろうか。本研究の結果からみれば、友人と活動はしていないが何か感じることもあるとき、自分自身について SS で自己のあり方を見いだしているだろうし、友人と活動はしているが感じるものがないとき、CS で友人との活動から自分自身について捉えていると考えられる。しかし一方で友人との活動もなかなか行われず何か感じることで低いとき、CS・SS という観点からの自分自身についての位置づけは行われにくいと考えられる。また友人と活動もするし、感じるものもある場合、先の例で言えばアンビバレントな印象を受ける。共に活動していくなかで CS 優位に自己が位置づけられていく一方で、友人関係における不安も感じている。しかし不安を感じてはいるが、活動を通して自分の感情も含めながら自分自身について考えることも出来るといえるのではないだろうか。

友人関係において、CS は行動的側面に、SS は感情的側面に関連していた。岡本(1997)は、「関係的自己(CS)」と「分離した自己(SS)」の両者が等しく重みを持ち、両者が統合された状態が本当に成熟した大人のアイデンティティであると述べている。本研究では友人関係における特徴ごとに CS と SS の検討を行ってきたが、両者の統合過程については仮説を提示することにとどまっており、今後、方法論的改良も含めた検討が望まれる。

第3章 心理臨床家からみた心理臨床場面での対人葛藤場面における個と関係性の検討

第1節 問題と目的

第3章では、友人関係における葛藤、特に山アラシ・ジレンマに着目する。青年期の友人関係における葛藤は潜在化されやすいという指摘(Ohbuchi & Takahashi 1994)もあるが、友人関係で葛藤が顕在化された場合に、どのような要因で顕在化し、その葛藤場面でCS・SSがどのように調整されていくのか、調整の結果がどのような対人行動を引き起こすのか、さらにはジレンマへの対処にはどのように結びつくのかについて、探索的に検討を行うことを目的とする。その際に、友人関係形成初期の自己が傷つけられるなどという予期に基づく現代に特徴的な山アラシ・ジレンマ(藤井, 2001)においては、典型的な山アラシ・ジレンマとは異なるCS・SSの調整方略が用いられ、それが対人行動やジレンマへの対処に関連していることを想定している。こうしたジレンマは内容や程度に違いこそあれ、青年期にある学生の誰しもが少なからず経験するものと考えるが、第3章では、CS・SSの調整方略および対人行動やジレンマへの対処のプロセスに研究の焦点をあてるために、それらが顕在化するであろう、学生相談におけるジレンマを扱っている心理臨床家へのインタビューを行う。

第2節 方法

2009年5～6月にA大学の学生相談を担当しているカウンセラー2名にインタビューを行った。カウンセラーには友人葛藤、山アラシ・ジレンマ、CS・SSについて話をした後、心理臨床家からみた現代青年の面接場面で、どのような相談がなされているのかについて尋ねた。その際、実際の相談事例ではなく、心理臨床家が活動の中で感じた青年像であることを前提とし、内容はカウンセラーの同意を得て、メモ・録音した。所要時間は60～100分。

第3節 結果と考察

カウンセラーXからはエピソードが1つ語られ、カウンセラーYからはエピソードが7つ語られた(表1参照)。ジレンマ等の種類は藤井(2001)の研究に沿って区分した。時期は、友人になる以前からなりはじめを形成期、友人になってから共に行動するまでを初期、それ以降を中期以降とした。

表 4 友人関係で葛藤が生起された時の要因やジレンマ等の種類

インタビュー結果	要因	ジレンマ等の種類	時期	カウンセラー
1	年齢、期待された役割	近づきたいー離れたい	中期以降	カウンセラーX
2	相手からの接近	近づきたいー近づきすぎたくない	形成期	カウンセラーY
3	所属	近づいてもらいたくない	形成期	
4	相手側からの接近	近づきたいー近づきすぎたくない	初期	
5	金銭感覚	近づきたいー近づきすぎたくない	初期	
6	死別体験	離れたいー離れすぎたくない	中盤以降	
7	期待された役割	近づきたい	形成期	
8	友人関係のあり方	離れたいー離れすぎたくない	中期以降	

話されたインタビュー結果を概観すると、要因は様々あるが、ジレンマ等の種類としては典型的な山アラシ・ジレンマである<近づきたいー離れたい>、藤井(2001)のいう現代に特徴的な山アラシ・ジレンマである<近づきたいー近づきすぎたくない><離れたいー離れすぎたくない>、そしてそれらのどれにも分類されない<近づいてもらいたくない><近づきたい>に分かれた。本研究では、山アラシ・ジレンマという葛藤場面での CS・SS の調整をみるため、それに特徴的な結果であった、1・2・8 を以下で紹介することとする。

結果 1 では、年齢差やそこから期待された役割によってジレンマが引き起こされ、友人と共にいたい期待された役割は本当の自分ではないため少し距離を置きたいという話であった。これは、典型的な山アラシ・ジレンマとまではいかないが、密接な関係に移りつつある時の「近づきたいー離れたい」ジレンマに該当するものであると考えられる。基本的に周りから求められている期待や役割によって自己を落ち付けようとしている(CS 重視)が、そのように振舞うのは本当の自分なのだろうかと思い、CS から SS へと向かう中でも自分の位置付けが決められずにジレンマを抱えていた。

結果 2 では、相手からの接近によってジレンマが引き起こされ、その相手と新しく友人になりたいが自分自身を相手と同等に見ることができないため近づけなかった話であった。友人関係が作られる最初の時期のジレンマで「近づきたいー近づきすぎたくない」ジレンマに当たると考えられる。自分自身は相手と友達になりたいという気持ちは有しているが、友達になるということは、(自分にとって相手と自分は同等ではないので)相手から「哀れまれる」存在になると感じ、それを恐れ、友人になることを拒否した。このことは他人の観点を取り入れながら自己を位置付けようとする点で、一見すると CS に近いものとも見える

が、他者の成長・援助という観点から自己を位置付けようとするものではなく、CS というよりも公的自己意識が高まっている状態とも言えよう。つまり、あくまでも他者から見られているという観点での SS を中心に自己を捉えているものであり、そこには被害的な位置づけの自己があるように思われた。そして、自分はどうかありたいのかという観点(SS 重視)から、相手と友達になった後の自分自身を予測し、それが「自分が哀れまれる」という結果を導き、相手との友人関係を形成することを回避したと考えられる。

結果 8 では、本人の友人関係のあり方によってジレンマが引き起こされ、友人とともにいたいのが現段階では近すぎているため少し距離を置きたいと感じる一方、距離を置くことによって友人関係が破綻ことを恐れるために離れられない話であった。数年共に行動しているため中期以降としたが、密接な関係になる前の表面的な関係における「離れたいー離れすぎたくない」ジレンマに該当するものと考えられる。この話では友人が共に行動することを望んでいると、本人自身は感じている。このように、他者が期待する自分自身を感じつつ(公的自己意識)も、自身は少し離れたいという他の人とは異なる独自の自分であることとの間に矛盾を感じ始めていたのではないだろうか。その結果、友人との距離をとろうと思うのだが、一方でそれにより他者から独りぼっちと思われること(公的自己意識としての SS)も懸念している状態と考えられる。他者の観点や期待までも感じてはいるものの、他者のために意味のある自己(CS)へ目を向けているのではなく、SS との食い違いの方を強く感じていると考えられる。

結局、この結果 8 では、友人が期待する自分自身と SS との食い違いを調整する方向ではなく、友人から直接的に距離を取ることでジレンマを解消することを決意し、実行する。そうした過程でも友人から「戻ってきてほしい」などといった、他者からの期待を感じながら(自己に結び付けていないという点で CS の前段階と言えるだろう)も、それと SS との食い違いから、居心地が悪いと感じていたのではないだろうか。第 2 章では、SS が促進されるのは、友人との活動そのものに注意が向けられた時ではなく、友人との活動の中での自分自身の感情に注意が向けられた時であるということを指摘した。この話では、友人集団の中での自分自身の感情に注意を向けることを中心にしながら、友人との距離をとる過程の中で、あるいはその結果として、SS を強めていったのではないかと考えられる。

第 4 節 まとめ

結果 1 では、親密な関係に発展する過程で、他者から求められていると感じている役割(CS)と、現在の自分自身の捉え方(SS)との間で交錯し、「近づきたいー離れたい」ジレンマが生じていた。一方で結果 2 では、関係が発展する以前の関係で、他者から見られている自分(公的自己意識)と、個としての自分(SS)との間に「近づきたいー近づきすぎたくない」といったジレンマを抱えていた。関係が発展する以前の関係でジレンマを抱えているということは、公的自己意識を中心に自分自身を捉え、そこから今後の関係を予期し、「周りからこ

んな風に見られたくない」「こんな風に思われたくない」と思い、今後の関係を回避しようとしているとも思われる。結果 8 は関係が発展する以前の関係という点、公的自己意識が働いている点では結果 2 と似ているが、最終的に友人との活動の中での自分自身の感情に注意を向け、SS を強めていったと思われる。

結果 1 では CS と SS とが行き来する形でのジレンマに陥っていたが、結果 2・8 では CS の方に重心が向きそうになりながらも、結果的に SS に向かう中でのジレンマであったと考えられる。ここから各々のクライアント、特に結果 8 では、ジレンマを解消する中で自己と他者がお互い居心地のよい距離を求めて行動するのではなく、自分自身の居心地がよくなるように SS を重視しているようにも思われる。このように、CS・SS 間のあり様がジレンマ自体と関わってくると考える。また結果 2 ではジレンマを引き起こした要因が相手からの接近で、そこには自分と相手を同等に見ることができず、友人となることで「哀れまれる」と感じることから、ジレンマを引き起こした背景に、自己を否定的に感じ、自分がその出来事の対象ないし被害者であると過剰判断する自己関係づけがあると考えられる。

典型的な「山アラシ・ジレンマ」は、結果 1 でみられたように、CS と SS とが行き来する形でジレンマが生じ、一方藤井(2001)がいう現代に特徴的な「山アラシ・ジレンマ」は、結果 2・8 でみられたように、CS の方に重心が向きそうになりながらも、結果的に SS に向かう中でのジレンマが生じていたと思われる。この 2 つを比べると、現代の山アラシ・ジレンマは SS を重視しすぎるがゆえにおこるジレンマであるとも考えられるだろう。また現代の「山アラシ・ジレンマ」が自己意識や自己関係づけなど、自己がどう見られているという点とも関連することが考えられた。

ジレンマを感じる時期にも着目すると、関係形成・関係初期には「近づきたいー近づきすぎたくない」ジレンマ、関係が共に行動する以上の場合には「離れたたいー離れすぎたくない」ジレンマであった。このように関係の成熟度によってジレンマが異なるのは、おそらく、人と関わる上での自己(CS)と、自分自身であろうとする自己(SS)とが関係していると思われる。人と関わり始めた段階では、その人から接近されるジレンマにおいて CS が促進され、それ以上になると回避するジレンマにおいて SS が促進されるとも考えられる。これは重要な他者と良好な関係を維持することと独立した個人として自分らしく生きることのジレンマ(平井,2005)が、時期によって異なることを示唆しているようにも思われる。

また、ジレンマを抱えていることは、ジレンマを抱えている人にとっては辛い状況であると思われるが、ジレンマ場面を解決しようとする過程において、CS と SS のバランスに注意を向ける機会が増大することにより、新たな自己発見を得ていく可能性があることも指摘したい。このような経験を踏まえて、CS と SS の両者が等しく重みを持ち、両者が統合された状態に至るならば、岡本(1997)の言う、本当に成熟した大人のアイデンティティに繋がる可能性があるのではないだろうか。

本章のデータは、二次資料であることは否めない。上記三点に集中した検討に留意したが、この三点にそれ以外の部分が重要な影響を与えている場合があったのだとすれば、そ

れを扱っていない問題が残る。本章が仮説形成的目的で出発した経緯から、その趣旨はある程度満たしたと考えるが、今後は、本章の結果も踏まえた上で、一次資料による検討が必要であろう。

第4章 大学生の対人葛藤場面における個と関係性の検討 【質問紙調査】

第1節 目的

第3章では、青年期の対人葛藤場面において自己意識、自己関係づけ、自己の二面性が関わっていることが示唆された。この葛藤場面での自己の3側面は一般青年においてどのように関連しているのだろうか。

現代の友人関係は変化しているという指摘があり、その背景には青年の自己の変化ということも考えられる。本研究では、最近の青年期の友人関係の持ち方の変化は、友人関係の本質的な変化というよりも、自己のあり方の変化が友人関係の持ち方の変化を促しており、また友人関係の持ち方の変化が自己のあり方の変化を導いていると考えている。このような変化は普段の対人関係でみられることは少ないと思われたため、変化が見られやすいと考えられる対人葛藤場面に焦点をあてる。そしてそこでの自己のあり方を研究対象とする。自己のあり方を検討する概念として、自己意識、自己関係づけ、自己の二面性を用いる。

第5章では、青年の葛藤場面における自己を検討するために個別の面接調査を行う。それに先立ち、第4章では、質問紙調査を行い、一般青年が葛藤場面や自己をどのように捉えているのか検討し、加えて面接調査の個別面接時の青年の質問紙結果と比較するための一般青年の基準を作成する。

第2節 方法

対象者：2009年7月・10月、青森県内の大学生を対象に、心理学関連の授業時に質問紙調査を行った。回答者は275名(男性150名、女性125名)で、平均年齢は19.15歳($SD=.90$)であった。

調査内容

自己に関する尺度【自己意識尺度】菅原(1984)による自己意識尺度26項目を用い、「1. 全くあてはまらない」～「6. 非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。【自己関係づけ尺度】金子(2000)による自己関係づけ尺度12項目を用い、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。【自己の二面性に関する尺度】山本(1989)が作成したC尺度(19項目)、S尺度(12項目)を用い、「1. 全くあてはまらない」～「6. よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

友人葛藤に関する尺度【山アラシ・ジレンマ尺度】藤井(2001)が作成した、＜近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ＞(21項目)、＜離れたたいー離れすぎたくないジレンマ＞(19項目)を用いる。まず、同性の重要なひとりの友人を想起し、その友人との関係を想定するように教示し、回答を求めた。

＜近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ＞について、「近づきたい」という前提となる欲求の有無について回答を求めた。藤井(2001)で設定した条件項目は「自分と相手が近づきあって、親しい関係でいたいと思いますか」であったが、近づくことと親しいことは異なることだと思われたため、本研究では「自分と相手が近づき合っていたいと思いますか」「自分と相手が親しい関係でいたいと思いますか」と条件項目を設定した。「1. いいえ」から「5. はい」の 5 件法で回答を求めた。続いて、条件項目に相反する項目として＜近づきすぎたくない＞19 項目について「1. 全く感じない」から「5. 非常によく感じる」の 5 件法で回答を求めた。

同様に＜離れたたいー離れすぎたくないジレンマ＞についても、前提となる欲求について、藤井(2001)では「相手と少し距離をとって、離れたたいともうことがありますか」であったが、「相手と少し距離をとっていたいと思うことはありますか」「相手と離れていたいと思うことはありますか」という項目を設定し、「1. いいえ」から「5. はい」の 5 件法で回答を求めた。続いて、条件項目に相反する項目として＜離れすぎたくない＞17 項目について「1. 全く感じない」から「5. 非常によく感じる」の 5 件法で回答を求めた。

分析方法：自己に関する尺度である自己意識尺度・自己関係づけ尺度・自己の二面性尺度の 3 尺度それぞれについて、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。抽出された各因子に.40 以上の因子負荷量を示す項目を各因子を構成する因子とし、各因子ごとのそれらの項目群の合計得点を算出するために、 α 係数の検討を行った。

次に、友人葛藤に関する尺度である山アラシ・ジレンマ尺度の＜近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ＞＜離れたたいー離れすぎたくないジレンマ＞の各尺度の分析は、各条件項目のどちらかに「はい」「どちらかといえばはい」と答えた対象者のみ抽出した(サンプル数は＜近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ＞尺度分析で 232、＜離れたたいー離れすぎたくないジレンマ＞尺度分析で 95 であった)。そしてそれぞれについて、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。抽出された各因子に.40 以上の因子負荷量を示す項目を各因子を構成する因子とし、各因子ごとのそれらの項目群の合計得点を算出するために、 α 係数の検討を行った。

各尺度の因子分析後に、自己に関する尺度と友人葛藤に関する尺度について、各項目群の平均値の相関を算出した。

第 3 節 結果

3-1. 自己意識尺度の因子分析結果

自己意識尺度全 26 項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、全項目に天井効果・フロア効果は共に認められなかった。慎重に因子を検討する目的から抽出因子数を理論的に限定せずに固有値 1 以上の打ち切り基準とし、主因子法、プロ

マックス回転による因子分析を行った。その結果、7 因子が抽出された。因子間相関に比較的高い相関(.023～.602)が認められたため、抽出因子数を菅原(1984)の研究結果に従い 2 因子とし、主因子法、プロマックス回転の因子分析を再度行った。その結果、因子間相関は.431 となり、パターン行列から理論的に予測される因子が抽出された。そのため、主因子法、バリマックス回転に切り替え、再々度因子分析を行った。因子数は菅原(1984) を参考に 2 因子(固有値 ≥ 3.12)を採択した。その際、ひとつの因子にのみ.40 以上の因子負荷量を示す項目をその因子を構成する項目とし、どの因子にも因子負荷量.40 より低い項目を削除し、主因子法、バリマックス回転による 4 回目の因子分析を行った(表 5 参照)。第 1 因子は「自分についてのうわさに関心がある」、「人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる」、「人に会う時、どんなふうにふるまえば良いのか気になる」が高負荷を示し、自分の姿や他の人に映る自己に目が向いているという因子であると考えられた。また菅原(1984) のいう公的自己意識にほぼ一致することから「公的自己意識」と命名した。第 2 因子は、「自分がどんな人間か自覚しようと努めている」、「ふと、一步離れた所から自分をながめてみることもある」、「つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」が高負荷を示し、自己の内面に目が向いている因子であると考えられた。また菅原(1984) のいう私的自己意識にほぼ一致することから「私的自己意識」と命名した。なお、因子負荷量.40 以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。平均値は、公的自己意識が 6 点中 4.387($SD=.80$)で、中央に位置する値より 1 以上も高かった。私的自己意識は 6 点中 3.907($SD=.89$)で、中央に位置する値より約.50 高い値となった。

表 5 自己意識の因子分析結果と各因子を構成する項目群の α 係数、平均値(標準偏差)

	公的自己 意識	私的自 己意識	h^2
17. 自分についてのうわさに関心がある	.745	.119	.568
20. 人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	.717	.171	.544
19. 人に会う時、どんなふうにふるまえば良いのか気になる	.705	.163	.523
1. 自分が他人にどう思われているのか気になる	.699	.022	.489
12. 他人からの評価を考えながら行動する	.698	.214	.533
24. 人の目に映る自分の姿に心を配る	.685	.330	.579
18. 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう	.608	.069	.374
25. 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	.584	.229	.394
8. 自分の容姿を気にするほうだ	.491	.137	.259
5. 人に見られていると、つかっこうをつけてしまう	.462	.258	.280
13. 世間体など気にならない	-.395	.031	.157
16. 自分がどんな人間か自覚しようと努めている	.129	.736	.558
14. ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある	.015	.733	.538
15. つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.003	.689	.475
9. しばしば、自分の心を理解しようとする	.259	.677	.525
22. その時々の方持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	.225	.602	.413
3. 他人を見るように自分をながめてみることもある	.101	.597	.366
11. 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	.109	.572	.339
23. 自分を反省してることが多い	.219	.505	.303
10. 自分自身に向かって話しかけてみることもある	.135	.469	.238
固有値	4.555	3.901	
累積寄与率	22.777	42.283	
α 係数	.886	.852	
平均値	4.387	3.907	
(SD)	(.80)	(.89)	

3-2. 自己関係づけ尺度の因子分析結果

自己関係づけ尺度全 12 項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、全項目に天井効果・フロア効果は共に認められなかった。慎重に因子を検討する目的から抽出因子数を理論的に限定せずに固有値 1 以上の打ち切り基準とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、2 因子が抽出された。因子間相関に比較的高い相関(.731)が認められたため、抽出因子数を金子(2000)の研究結果に従い 1 因子とし、主因子法による因子分析を再度行い、1 因子(固有値 ≥ 6.29)を採択した(表 6 参照)。第 1 因子は「話している集団と目が合うと、自分のことを言われているのではないかと気になる」、「友達が悪口を言っているのを聞くと、自分のことを言っているのではないかと思う時がある」、「友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる」が高負荷を示し、友人の行動の背景を自分自身と関連付けている因子であると考えられた。また金子(2000)のいう自己関係づけにはほぼ一致することから「自己関係づけ」と命名した。なお、因子負荷量.40 以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。平均値及び標準偏差は、5 点中 2.946($SD=.91$)と、中央に位置する値とほぼ変わらない結果となった。

表 6 自己関係づけの因子分析結果と各因子を構成する項目の α 係数、平均値(標準偏差)

	自己関係づけ	h^2
4. 話している集団と目が合うと、自分のことを言われているのではないかと気になる	.781	.610
7. 友達が悪口を言っているのを聞くと、自分のことを言っているのではないかと思う時がある	.780	.609
1. 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる	.773	.598
5. 自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分のことを言われているのではないかと思う時がある	.752	.565
2. 隣に座っている人が他の席に移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある	.738	.545
6. 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある	.720	.519
11. 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う	.712	.507
3. 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある	.686	.471
10. 周囲の笑い声が、自分を笑っているように聞こえるときがある	.653	.426
8. 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある	.631	.398
12. いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある	.596	.355
9. 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる	.446	.199
固有値	5.801	
寄与率	48.344	
α 係数	.916	
平均値	2.946	
(SD)	(.91)	

3-3. 自己の二面性尺度の因子分析結果

自己の二面性尺度全 31 項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、全項目に天井効果・フロア効果は共に認められなかった。慎重に因子を検討する目的から抽出因子数を理論的に限定せずに固有値 1 以上の打ち切り基準とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、9 因子が抽出された。因子間相関に比較的高い相関($-.440 \sim .480$)が認められたため、抽出因子数を山本(1989)の研究結果に従い 2 因子とし、主因子法、プロマックス回転の因子分析を再度行った。その結果、因子間相関は .060 となり、パターン行列から理論的に予測される因子が抽出された。そのため、主因子法、バリマックス回転に切り替え、再々度因子分析を行った。因子数は山本(1989)を参考に 2 因子(固有値 ≥ 4.12)を採択した。その際、ひとつの因子にのみ .40 以上の因子負荷量を示す項目をその因子を構成する項目とし、どの因子にも因子負荷量 .40 より低い項目を削除し、主因子法、バリマックス回転による 4 回目の因子分析を行った(表 7 参照)。第 1 因子は「人に尽くすことに喜びを感じる」、「他人のことでも見てみぬふりをしておくことができない」、逆転項目である「悲しんでいる人をみてもあまりピンとこないことが多い」が高負荷を示し、他者への共感・心配りや他者の期待に沿うように自分の行動を決めている因子であると考えられた。また山本(1989)のいう自己の **Connected** な側面にほぼ一致することから「CS」と命名した。第 2 因子は、一連の逆転項目である「自分の意見をはっきり言うのにためらいを感じるが多い」、「人から非難されると非常にこたえる」、「自分の本当にやりたいことがよく解らない」が高負荷を示し、他者と自己は別の存在であって自分の行動・価値は自分自身で決めることを意味する因子であると考えられた。また山本(1989)のいう自己の **Separated** な側面にほぼ一致することから「SS」と命名した。なお、因子負荷量 .40 以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。CS の平均値及び *SD* は 2.749(.48)で、SS は 2.825(.52)であった。共に中央に位置する値よりもやや高い値で、*SD* は低めだった。

表 7 自己の二面性の因子分析結果と各因子を構成する項目の α 係数、平均値(標準偏差)

	関係的 自己 (CS)	分離し た自己 (SS)	h^2
31. 人に尽くすことに喜びを感じる	.635	.064	.407
7. 悲しんでいる人をみてもあまりピンとこないことが多い*	-.592	.005	.350
24. 他人のことでも見てみぬふりをしておくことができない	.576	-.088	.339
15. 周囲の人々の幸せが私の幸せだ	.575	.041	.333
30. 苦勞している人を見ると同情せずにはいられない	.550	.182	.336
1. 人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある	.521	.198	.311
16. 周囲の人の期待にはなるべく応えようとしている	.482	.012	.232
10. 自分の個性や能力を生かそうと努めている	.454	-.277	.282
14. 他人のことには自分のことほど一生懸命になれない*	-.430	-.037	.186
8. 他人の気持ちには関心がない	-.383	-.162	.173
26. 周りの人と協調していくことができる	.367	-.177	.166
28. 自分の意見をはっきり言うのにためらいを感じる事が多い*	-.060	.635	.407
29. 人から非難されると非常にこたえる*	.293	.580	.422
27. 自分の本当にやりたいことがよく解らない*	-.212	.564	.363
4. 一度決めたことでも、人から何か言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう*	.098	.540	.301
2. 人にどう思われるかということとはあまり気にしない	-.254	-.522	.337
25. 日常のささいな出来事や人間関係に、あまり心をわずらわされることはない	-.295	-.496	.333
22. 自分のことでも人から「こうしなさい」と言われたほうが楽だ*	-.066	.482	.237
20. 自分の権利をはっきりと主張する	.175	-.474	.256
9. 人を傷つける様なことをしたのではないかと、ひどく気がとがめることがある	.284	.459	.291
13. 生きていくうえで目指す目標がある	.372	-.385	.286
固有値	3.443	2.904	
累積寄与率	16.397	30.226	
α 係数	.785	.774	
平均値	2.749	2.825	
(SD)	(.48)	(.52)	

※ *は逆転項目を表す

3-4. <近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ>の因子分析結果

<近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ(以下 APP)>尺度全 21 項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、天井効果・フロア効果は共に認められなかった。次に、各条件項目のどちらかに「はい」「どちらかといえばはい」と答えた対象者のみ抽出した。慎重に因子を検討する目的から抽出因子数を理論的に限定せずに固有値 1 以上の打ち切り基準とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、5 因子が抽出された。因子間相関に比較的高い相関($-.034 \sim .642$)も認められたため、抽出因子数を藤井(2001)の研究結果に従い 2 因子とし、主因子法、プロマックス回転の因子分析を再度行った。その結果、因子間相関は .386 となり、パターン行列から理論的に予測される因子が抽出された。そのため、主因子法、バリマックス回転に切り替え、再々度因子分析を行った。因子数は藤井(2001)を参考に 2 因子(固有値 ≥ 2.77)を採択した。その際、ひとつの因子にのみ .40 以上の因子負荷量を示す項目をその因子を構成する項目とし、どの因子にも因子負荷量 .40 より低い項目を削除し、主因子法、バリマックス回転による 4 回目の因子分析を行った(表 8 参照)。第 1 因子は「相手の迷惑にはなりたくない」、「自分の性格上の欠点(わがまま・短気など)で、相手を傷つけない」、「踏み込みすぎて嫌われたくない」が高負荷を示し、友人と近づいていたい相手を傷つけることを回避し深く踏み込まないようにしている因子であると考えられた。また藤井(2001)のいう相手を傷つけることの回避にほぼ一致することから「(APP)相手を傷つけることの回避」と命名した。第 2 因子は、「相手の気持ちを打ち明けられて重荷を背負いたくない」、「相手に振り回されたくない」、「相手に深入りされたくない」が高負荷を示し、友人と近づきたいが自分が傷つくことを恐れ深く踏み込まれることを回避している因子であると考えられた。また藤井(2000)のいう自分が傷つくことの回避にほぼ一致することから「(APP)自分が傷つくことの回避」と命名した。なお、因子負荷量 .40 以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。平均値及び SD は、相手を傷つけることの回避は 3.716(.71)で、自分を傷つけることの回避は 2.571(.74)であった。相手を傷つけることの回避は、中央に位置する値より 1 以上大きく、自分を傷つけることの回避はやや低めであった。

表 8 APP の因子分析結果と各因子を構成する項目の α 係数、平均値(標準偏差)

	相手を傷 つけるこ との回避	自分が傷 つくこと の回避	h^2
9. 相手の迷惑にはなりたくない	.773	.061	.602
6. 自分の性格上の欠点（わがまま・短気など）で、相手を傷つけたくはない	.720	-.037	.520
15. 踏み込みすぎて嫌われたくない	.709	.236	.558
18. 踏み込みすぎて相手を傷つけたくはない	.691	.082	.485
3. 相手の重荷にはなりたくない	.640	.092	.418
17. 相手の気持ちをうまく受け止めきれないことで傷つけたくはない	.549	.176	.333
16. 自分の醜い部分を見られたくはない	.511	.298	.350
12. 自分の意見や価値観を押しつけたくはない	.503	.177	.350
19. 相手を束縛したくはない	.439	.117	.207
5. 相手の気持ちを打ち明けられて重荷を背負いたくはない	.065	.742	.554
10. 相手に振り回されたくはない	.101	.736	.552
7. 相手に深入りされたくはない	.146	.705	.518
8. 相手の醜い部分を見たくはない	.201	.598	.398
1. 相手に甘えられることで重荷を背負いたくない	-.027	.563	.318
4. 自分の本心は知られたくない	.199	.552	.345
13. 相手の意見や価値観を押し付けられたくはない	.256	.536	.353
14. 相手に束縛されたくはない	.230	.508	.310
11. 自分がなくなるような気がして近づくのが怖い	.043	.409	.169
固有値	3.752	3.523	
累積寄与率	20.842	40.412	
α 係数	.851	.842	
平均値	3.716	2.571	
(SD)	(.71)	(.74)	
N=232			

3-5. <離れたいー離れすぎたくないジレンマ>の因子分析結果

<離れたいー離れすぎたくないジレンマ(以下 LEA)> 尺度全 19 項目について、まず天井効果とフロア効果について検討した。その結果、天井効果・フロア効果は共に認められなかった。次に、各条件項目のどちらかに「はい」「どちらかといえばはい」と答えた対象者のみ抽出した。慎重に因子を検討する目的から抽出因子数を理論的に限定せずに固有値 1 以上の打ち切り基準とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果 3 因子が抽出された。因子間相関に比較的高い相関(.426～.505)が認められたため、抽出因子数を藤井(2001)の研究結果に従い 2 因子とし、主因子法、プロマックス回転の因子分析を再度行った。その結果、因子間相関は.545 となり、パターン行列から理論的に予測される因子が抽出された。そのため、主因子法、バリマックス回転に切り替え、再々度因子分析を行った。因子数は藤井(2001)を参考に 2 因子(固有値 ≥ 2.21)を採択した。その際、ひとつの因子にのみ.40 以上の因子負荷量を示す項目をその因子を構成する項目とし、どの因子にも因子負荷量.40 より低い項目や複数の因子にまたがって因子負荷量 40 以上を示す項目を削除し、主因子法、バリマックス回転による 4 回目の因子分析を行った(表 9 参照)。第 1 因子は「相手に辛い思いをさせたくない」、「相手に寂しい思いをさせたくはない」、「相手を傷つけたくはない」が高負荷を示し、自分が離れることで友人に辛く寂しい思いをすることを回避している因子であると考えられた。また藤井(2001)のいう相手が寂しい思いをすることの回避とほぼ一致することから「(LEA)相手が寂しい思いをすることの回避」と命名した。第 2 因子は、「自分がひとりぼっちになりたくはない」、「自分が寂しい思いをしたくはない」、「自分の居場所をなくしたくはない」が高負荷を示し、友人と離れることによって自分が寂しくなることを回避する因子であると考えられた。また藤井(2000)のいう自分が寂しい思いをすることの回避にほぼ一致することから「(LEA)自分が寂しい思いをすることの回避」と命名した。なお、因子負荷量.40 以上の項目を、各因子を構成する項目とし、 α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。平均値及び *SD* は、相手を傷つけることの回避は 3.743(.79)、自分が傷つくことの回避は 3.105(.82)であった。両因子共に中央に位置する値より高かった。

表 9 LEA の因子分析結果と各因子を構成する項目の α 係数、平均値(標準偏差)

	相手を傷 つけるこ との回避	自分が傷 つくこと の回避	h^2
11. 相手に辛い思いをさせたくない	.851	.085	.732
3. 相手に寂しい思いをさせたくはない	.747	.211	.602
17. 相手を傷つけたくはない	.712	.118	.521
12. 相手に嫌われたくはない	.688	.261	.541
6. 自分が相手を突き放したとは思われたくない	.683	.188	.502
14. 相手をひとりぼっちにさせたくはない	.649	.230	.474
9. 相手のことを嫌いになったとは思われたくない	.648	.132	.437
4. 自分がひとりぼっちになりたくはない	.144	.740	.569
1. 自分が寂しい思いをしたくはない	-.064	.736	.546
2. 自分の居場所をなくしたくはない	.139	.674	.474
7. ひとりになるのは心もとない	.303	.572	.419
16. 関係が崩れそうで離れるのが怖い	.321	.505	.358
5. 逆に相手から攻撃されそうで怖い	.134	.456	.226
8. 自分が冷たい人間のような気がして離れられない	.247	.409	.228
固有値	3.888	2.742	
累積寄与率	27.772	47.357	
α 係数	.885	.802	
平均値	3.743	3.105	
(SD)	(.79)	(.82)	
$N=95$			

3-6. 相関分析結果

各因子分析で抽出された因子の関係を検討するために、各因子の合計得点の相関係数を算出した(表 10 参照)。自己意識、自己関係づけ、自己の二面性の各因子は全て弱い相関から中程度の相関関係($r=.129\sim.617$)が認められた。特に公的自己意識は自己関係づけや SS と、また自己関係づけと SS とが中程度の相関関係となっており、自分の姿や他の人に映る自己に目が向いている人ほど、友人の行動の背景と自分自身を関係付けて考えようとする傾向が高く、自己の内面に生じたことに焦点化して自分自身を考えようとする傾向が高かった。

<近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ>の「相手を傷つけることの回避」は公的自己意識、私的自己意識、自己関係づけ、SS と正の弱い相関関係が認められた。一方、「自分を傷つけることの回避」は CS とのみ、低い負の相関関係が認められた。

<離れたたいー離れすぎたくないジレンマ>の「相手が寂しい思いをすることの回避」は公的自己意識、自己関係づけ、CS、SS と弱～中の正の相関関係が認められた。「自分が寂しい思いをすることの回避」は公的自己意識、自己関係づけ、CS、SS と弱～中程度の正の相関関係が認められた。特に<離れたたいー離れすぎたくないジレンマ>は因子に関わらず、公的自己意識、自己関係づけ、CS、SS との相関関係が認められている。

表 10 各因子(合成得点)の因子分析表

	公的自己意識	私的自己意識	自己関係づけ	CS	SS
公的自己意識					
私的自己意識	.397**				
自己関係づけ	.617**	.180**			
CS	.288**	.224**	.289**		
SS	.538**	.129*	.454**	.132*	
APP 相手を傷つけることの回避	.343**	.151*	.366**	.102	.245**
APP 自分を傷つけることの回避	.010	-.039	.079	-.213**	-.053
LEA 相手が寂しい思いをすることの回避	.439**	.067	.439**	.390**	.445**
LEA 自分が寂しい思いをすることの回避	.534**	.127	.460**	.340**	.261*

** 相関係数は 1%水準で有意

* 相関係数は 5%水準で有意

第4節 考察

自己意識に関する因子分析を行った結果「公的自己意識」、「私的自己意識」が抽出された。自己関係づけの因子分析を行った結果「自己関係づけ」因子が、自己の二面性の因子分析を行った結果「CS」と「SS」とが抽出された。これら5因子は共に相関関係が認められ、特に公的自己意識、自己関係づけ、SSが共に中程度の相関関係にあった。このことから、他者の目に映る自分自身に目が向けば向くほど、友人の行動の背景を自分自身に関係づけやすく、さらにそこから自分自身を捉えようとする考えられる。これは、友人と共に行動するなかでの自分の感情が友人に対し被害的になることによって、自己を被害的にとらえていると考えられる。

＜近づきたいー近づきすぎたくないジレンマ＞の因子分析をした結果、「相手を傷つけることの回避」「自分が傷つくことの回避」の2因子が抽出された。「相手を傷つけることの回避」は公的自己意識、私的自己意識、自己関係づけ、SSと正の低い相関関係が認められ、一方「自分を傷つけることの回避」はCSとのみ、低い負の相関関係が認められた。相手を傷つけたくなければいけませんほど、公的・私的自己意識得点が上昇すると考えられる。また相手を傷つけるのは自分のせいだとも考えやすい。そしてそのように考えたことも元に、自分自身を捉えることが考えられる。一方「自分を傷つけることの回避」は友人と近づくことで自分が傷つくことがあってもそれを恐れないと考えることができよう。

＜離れたたいー離れすぎたくないジレンマ＞の因子分析をした結果、「相手が寂しい思いをすることの回避」、「自分が寂しい思いをすることの回避」の2因子が抽出された。この2因子は、因子の別に関わらず公的自己意識、自己関係づけ、CS、SSとの正の相関関係が認められた。他者から見られる自分に目を向け、それが被害的に自分自身を捉えたときに、自他共に寂しい思いをすることの回避をするのではないだろうか。

平均値及び標準偏差は、公的自己意識・私的自己意識、CS・SS、APP相手を傷つけることの回避、LEA相手を傷つけることの回避、LEA自分が傷つくことの回避が中央に位置する値より高く、APP自分が傷つくことの回避は低かった。自己関係づけはほぼ変わらなかった。平均値が高いということは、多くの青年が上記の概念を感じやすいと思われる。特に公的自己意識とAPP相手を傷つけることの回避は1以上も高かったことから、青年は人から見られている自分に目が向くこと、そして相手を傷つけることを恐れて葛藤を回避している傾向が高いことがうかがえる。

本章は、現代の山アラシ・ジレンマ時の自己意識、自己関係づけ、自己の二面性(CS・SS)の関連を検討すること、個別面接時の基準作成を目的としており、それはおおむね満たされたと思われる。この結果をもとに、面接調査を行う。

第5章 大学生の対人葛藤場面における個と関係性の検討 【面接調査】

第1節 目的

第4章では青年期の葛藤場面における自己の諸相を質問紙により検討した。しかし青年期の友人関係における葛藤は潜在化されやすいという指摘(Ohbuchi & Takahashi 1994)もあることから個別の面接にて検討を行う。その際、SCTとTATを投影法検査バッテリーとして用いる。また、質問紙や投影法テストバッテリーでは語られない、青年自身や青年の抱える葛藤について細やかに検討するために面接法も導入した。

第2節 方法

対象者：大学生2名。上記2009年7月実施の質問紙調査において面接調査への承諾を得た対象者である。

調査内容：①精研式文章完成法は、友人関係だけでなく、身体的要因や家族的要因など様々な側面が捉えられる。本研究では、自己・友人関係のみ取り扱うためその側面のみを用いた。そして葛藤場面や公的自己意識・私的自己意識、自己関係づけ、CS・SSの項目(因子分析時に因子負荷量が多かった2項目)を加え、友人関係に関する文章完成法SCTを作成した。また他の投影法テストや面接を考慮に入れ、負担になりすぎないよう項目数を最小限にした②TAT：友人関係に関するTAT図版を検討した結果、精研式TAT3B、3G、4F、8G、8Fが候補に挙がった。本調査は友人葛藤が起こっている中、協力者がどのように葛藤を捉え、葛藤解消過程を思い描くのかを見るために、その中でも友人関係で諍いが起こっている図版であると思われる3Bのみを使用した。③上記2009年7月実施の質問紙調査の結果。④面接：自分自身や友人関係に関する半構造化面接。「自己をどのようにとらえているのか」「自身の友人関係をどう思っているのか」ということを中心に聞いていった。さらに①②③の結果について対象者と共に検討するという方式で面接を行った。

調査時間：①と②を合わせて40～50分、④は50～110分であった(①②は同日、④は別の日に行った)。

第3節 結果と考察

3-1. 質問紙

まず、対象者であるAとBの質問紙調査結果を表1に示す。

Aは私的自己意識、SS得点が高く、自己関係づけ得点が低かった。自己の内面に目が向きやすく、そこから自分自身を捉える傾向にあると思われる。一方自己関係づけ得点は低く、相手の行動を自己に被害的に関係づけることはあまりないようである。近づきたいー近づきすぎたくないジレンマは、条件項目で差があるものの、親しい関係でいたい点において、自分が傷つきたくないというジレンマを中程度感じる傾向にあるようだ。離れたたいー離れすぎたくないジレンマは、条件項目の得点が高くかつ回避もしていないことから感じ難い

傾向のようである。ジレンマの違いに関わらず相手を傷つけることへの回避得点が低く、離れたたいー離れすぎたくないジレンマでは自分を傷つけることの回避得点も低かった。全般的に自他が傷つくということでのジレンマはあまり感じないようである。

表 10 A,B の下位尺度得点及びジレンマの条件項目の素点

尺度	各下位尺度の因子名	A の得点	B の得点	全体平均値(<i>SD</i>) /最大値
1	①公的自己意識	3.5	5.8	4.39(.80)/6
	②私的自己意識	5.33	5.22	3.91(.89)/6
2	自己関係づけ	1.17	4.33	2.95(.91)/5
3	①CS	2.78	3.33	2.75(.48)/4
	②SS	3.22	1.67	2.17(.52)/4
4	近づきたいー親しい関係でいたい 近づきすぎることの	<1-4>	<3-4>	
	①相手を傷つけることの回避	2.89	4.89	3.72(.71)/5
	②自分が傷つくことの回避	3.11	3.44	2.57(.74)/5
5	少し距離をとりたいー離れたたい 離れすぎることの	<4-5>	<5-5>	
	①相手を傷つけることの回避	2.43	3.29	3.74(.79)/5
	②自分が傷つくことの回避	1.57	2.29	3.11(.82)/5

< >内はジレンマ条件項目素点

■は平均値+*SD*以上、~~~~は平均値-*SD*以下の得点

B は公的自己意識、私的自己意識、自己関係づけ、CS 得点が高いことが特徴である。特に公的自己意識が非常に高く、友人の行動を自己に被害的に関係づける点や CS 得点の高さとの関連が推測される。また、私的自己意識の高さから自己の内面に目が向く傾向があるが、それが SS 得点に関連していないのも B の特徴と言えよう。また B は条件項目得点と相手を傷つけることの回避得点が高かったことから、近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを感じやすい傾向にあると思われる。離れたたいー離れすぎたくないジレンマは、条件項目の素点に対し自他を傷つけることの回避得点が平均値ないしそれより低いことから、ジレンマを感じていても中程度若しくは弱いものと考えられる。

3-2. TAT

A・BそれぞれのTATの結果分析については、マーレーの欲求分析を基本とし、欲求、圧力、結末、及び結末に至る経過に留意して検討を行った。

Aは図版を見て「話し合い」と言い、すぐに「いい争い、意見が違って言い争っている」と言い換え、葛藤場面という圧力への直面化を試みている。メンバーそれぞれの欲求を細やかに話し、言い争っている人物の後ろにいる人物に特に自己を投影していると考えられる。さらに、後ろにいた人物の意見を葛藤状態の人物が主張しているという点が特徴的である。他者の参与によって葛藤解決の糸口を得て、最終的には後ろにいる人物が自分でその欲求を伝えることが可能になり葛藤が解決していく。結末に至るまでに、図版中の各々の人物に自己を投影し、各々の人物の自己主張という形式でストーリーが展開する点が特徴と考える。

Bはまず図版を見て数秒考えた後「話し合い」場面と言い、その後「ちょっと対立」と言い換えた。葛藤場面という圧力に直面化出来ず、圧力を回避する方向へ欲求が向かっているものとする。その結果、葛藤状態の人物ではなく、一人葛藤場面から離れている人物に自己を投影し、「第3者」「あまり深い関わりではないからちょっと離れて見てみよう」と言ったように、葛藤の少ない図版中の人物の心情のみを語った。さらに特徴的なのは、葛藤解決の具体的過程を語ることなく(葛藤そのものについての語りもないのだが)、いきなり「仲直り」とい結末が語られたことである。

3-3. 事例A

Aは面接中「自分一人で悩もうと決めた時には、他の人に入ってきて欲しくない」と語った(SCT5. 私が知りたいことはいつも自分で知ろうとする(他人にあまり開かない); 10. どうしても私は自分の気持ちを大切にしたい)。質問紙の結果で私的自己意識、SS得点が高かったことから、Aは自己の内面に注意が向きやすく、そこから自己を捉えた結果としてのSSが自己の中心にあると考えられる。対人葛藤場面について、Aはグループのリーダーになった経験を振り返り、「理想のリーダーであろうと一人で頑張っていた。でもメンバーから不満を言われ、揺れ動いた」「みんなに迷惑を掛けて自分はリーダーに向いていないのではないかと悩んだ」と話している。AはSS中心に自己を捉え、自分が思い描くリーダーに向かっていったが、途中メンバーからの不満を聞くという他者の期待・要求に耳を傾けることによってCSが活性化され、SSとCS間の対立が生じたと考えられる。その後Aは他のグループメンバーと話すこと(CS)によってSSが調整され、自分らしいリーダー像を調整して行った。AはSSとCSが交わる中で葛藤を生じていたが、葛藤経験をきっかけに新たな自己を獲得していったともいえる。A自身も「行きつ戻りつ、変わりながらでいいから柔軟にやっていきたい」と語っており、こうした自己変容を受け入れる素地にCSが活性化される出来事が加わることによって、CSのみならず基軸となるSSも共に成長していく可能性を示しているものとする。

一方でAは「普段親友とは親しく話すが、本当に悩んでいることは言わない。本当なら親友に相談したいが、実際に相談するなら知らない人の方が気が楽だし、親友に弱いところを見せたくない。」とも語っている。質問紙結果で見てきたようにAは、近づきたいー近づきたくないジレンマを抱える傾向がある。Aは質問紙において私的自己意識が高く公的自己意識が低かったが、SCTで「友人は私のことどう思っているんだろう？(SCT3)」と書いている。また面接で「親しい人がいると気にする」とも話していたことから、親しい友人がいる際など、特定の場合には公的自己意識も上昇すると考えられる。親しい友人に関連して、Aは「浅い付き合いの人には真面目と言われるが、深い付き合いをしている人にはいい加減と言われる」「親友が相談してきた時には自分のことのように考えたい」と話しており、親友と浅い付き合いの人たちとの間を明確に区別すると共に、両者の間の心理的距離の大きさもうかがわせている。さらに、面接で浅い付き合いの人たちには「(自分の)理想像に近い形で接していく」し、そのことで「今まで相手が持っていた自分のイメージを崩したくない」と語り、親友になると「甘えて」「素の自分」になると語った。前者では公的自己意識は高まらず私的自己意識による理想像としての自己への注意が向き、後者の親友には「いい加減」などと言われながらもその方が「楽で」、そうしたフィードバックにより公的自己意識が高まる可能性が考えられる。Aは、質問紙調査時に想起した人物である「友人」(「親友」と記していたが、面接調査の結果、親友になる前の段階の友人であると確認できたので「友人」と記す)に「弱った自分」を見られて「イメージを崩したくない」(公的自己意識)と思っている。そのためAは「友人」に近づきたいと思っているが、近づくことによって、自分の「いい加減」な面を見られることを回避(自分が傷つくことの回避)しようとし、近づきすぎたくないジレンマを抱えていたと考えられる。

3-4. 事例 B

Bは「自分のことしか考えられない」「自分についてよく分からない」と言っており(SCT2. 私は自分のことについて、ときどきわからなくなる。しかし、わかろうとして、自分自身に問いかけることがたまにある。7. 内にある自分に、ときどき戸惑うことがある。)、これは私的及び公的自己意識が非常に高く、SS 得点が低いこととも一致していると思われる。自分自身に注意を向け考えようとしているが、「自分に自信が持てず」に自身の抱く自己に確かな手ごたえを感じられずに戸惑っている状態であると思われる。

Bは、友人との付き合いにおいて、「友人に近づきたくて接近するが、友人の短所が見えてくるから苦手」と話しており、SCTでは「友人に近づくことは少しためらいがある。適度な距離をたもっていたい(SCT4)。友人は私とは近づきすぎず離れすぎず、調度よい関係であると思う(SCT3)。」と書いている。質問紙結果も特徴的なように、Bは自他を傷つくることを回避することから近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを抱えやすい傾向があると思われる。つまり自分や他者が傷つくことを避けるために、親しくしたい友人にさえも近づきすぎないようにしているのではないだろうか。またBは自己関係づけ得点が高く、

対人関係の中で自己を被害的に判断しやすい傾向も認められる。こうしたことから B は、自分自身を考えようとしているのだが「自分の短所を出したくない」と思い、自分自身の否定的な評価に敏感になり、自他を傷つけない人間関係を指向していると思われる。

B は、SCT にて「3. 争いはキライである。なるべく避けたい。」「8. 友人と意見が違った時に私の方が友人の意見にしたがう。」「12. 友人とケンカしたときは、すぐにあやまる。」など、葛藤を想起させるものには全て、自己を表に出さないという手段で葛藤を回避しようとしている。また面接時にも「ある人といるとイライラするが、その人に対してイライラしているとは言えない。他者を尊重しているから」など、対人葛藤という認識に至らないようにしている傾向もうかがえる。またその解決方法として「考えない」ようにして現実逃避をし、イライラや「自分を引っ込める」などの理由について自身を「未熟だから」と位置付け、「相手を傷つけず円満な人間関係でいたい。それで自分の意見が尊重されなくてもよい」とも話している。B は対人葛藤場面において、そのごく初期に SS に基づき行動する側面も若干あるのだが、少しでも葛藤場面が想起されるとすぐに自己を引っ込める(SCT13. 友人が悪口を言っているのを聞くと、注意したくなるが、できないので、そのまま聞く。)。そして表面上円満な人間関係を築こうとする。B は葛藤の比較的初期に親しくなりたいが、自己も他者も傷つくことを回避したいということからジレンマを感じ、誰も傷つけないための現実逃避をしていると考えられる。また、B は葛藤解決の経過よりも一足飛びの「仲直り」「円満さ」に至りやすい。こうした一連の傾向は、TAT 結果にも顕著にあらわれていると考える。

B は私的・公的自己意識は高いのだが、葛藤場面になるとすぐに自他の傷つきを恐れて葛藤を回避し、現実からの逃避をしているため、質問紙結果としての CS 得点よりも実際は他者の期待・要求に注意を向けその中で自己を捉える傾向はそれ程高くないと思われる。B の CS 得点は一足飛びの葛藤解決を「円満」に終えることで高くなっているのであって、B 自身の実際の人間関係における CS とは言い難いのではないだろうか。つまり B のもつ友人関係の持ち方やジレンマのあり方は、藤井(2001)のいう現代に特徴的な友人関係の持ち方で、自他を傷つけることを恐れ葛藤を回避しているといえよう。それには B の自己関係づけや面接で語られた友人との関係における「自信のなさ」、葛藤を直視せずに円満にことを終わらせようとする B 固有の CS が関係しているのではないだろうか。

第4節 まとめ

本研究の結果、A は質問紙調査の段階で想定してもらった「友人」とは近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを生じていた。要因としては公的自己意識の上昇に伴い「いい加減」な自分を見せることが出来ず、自分が傷つくことを回避したためであったと思われる。また質問紙を行った時期と面接を行った時期が 5 カ月と離れていたため、A の中で「友人」との心理的距離が変わった可能性も考えられる。しかし A は、自身の過去を振り返っ

たときに、SSを基軸としながらも、他者からの期待・要求に耳を傾ける(CS)ことによってSSとCSを調整していった。その過程をみると、永田(1989)の述べた4点に当てはまっているとも考えられる。Aはジレンマとしては近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを抱えやすいが、生じたジレンマに直面化し、解消しようと試みることができると言えるであろう。これは、第3章で述べた、ジレンマ場면을解決しようとする過程において、CSとSSのバランスに注意を向ける機会が増大することにより、新たな自己発見を得ていく可能性に繋がるのではないだろうか。

Bは質問紙調査の段階で想定してもらった人物に近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを抱いていた。要因は、近づきすぎて自分や友人の短所が出ることにより傷つくことを回避していたためだと思われる。Bの起こしていたジレンマは藤井(2001)がいう現代に特徴的なジレンマだと思われ、それにはBの自身のなさやB固有のCSが関連している可能性が考えられた。BはSSも低いために自信を持てず、また過去の経験を乗り越え切れず、このようなジレンマを引き起こしている可能性も考えられる。そのためCSと交差できず、回避するしかないのではないだろうか。

本研究では事例Aで友人関係が自己に与える影響、事例Bで自己のあり方が友人関係に与える影響を検討したと考えている。青年期の友人関係を検討するにあたって、今後も友人関係のみならず、自己が友人関係に与える影響を検討されることが望まれる。

第6章 総合考察

第2章では、最近の青年の友人関係を活動的側面と感情的側面から捉えるために、CS・SSとの関連を検討した。その結果、CSは友人関係の活動的側面の影響を、SSは感情的側面の影響を強く受けていることが見出された。つまりCSは友人と共に行う活動を友人からの期待・要求に注意を向けながら指向することによって、そこから自分自身を捉えようとする働きが促進され、SSは友人という時の自分自身の感情に注意を向けながら、その結果を自己のあり方と結び付けていくものと考えられた。第3章で青年が葛藤を抱えた状況での自己を検討した結果、典型的な「山アラシ・ジレンマ」ではCSとSSが交錯する形でのジレンマが生じられ、現代に特徴的な「山アラシ・ジレンマ」では、CSに向かいながらも公的自己意識などの要因でSSに向かうなかでのジレンマであることが考えられた。第5章で面接調査を行ったところ、Aは近づきたいー近づきすぎたくないジレンマを抱えてはいたが、A自身を考えると、AはCSとSSとが交錯する形でのジレンマで、CSとSSを調整することでジレンマを解消していくと考えられる。一方BはSSが中心にあるが、自分自身に自信がなく、かつ自分を被害的に位置づけていたためにCSが促進されず、仮のB固有のCS(一足飛びに円満な解決を求める傾向)で自己を捉えようとしていると考えられた。その中で葛藤が起きたとしても、仮のため向き合おうとせず、回避しているとも考えられる。

質問紙調査において公的自己意識・私的自己意識、CS・SS、APP 相手を傷つけることの回避、LEA 相手を傷つけることの回避、LEA 自分が傷つくことの回避得点が高かった。これは、青年が自己に関することに関心を抱いていながらも、対人場面、特に葛藤場面では自他を傷つけないよう回避する傾向が高いことを示していると思われる。特に公的自己意識、APP 相手を傷つけることの回避の平均値が高かったことから、人から見られている自分に目が向き、相手を傷つけることを回避している傾向が強いことが示されている。現代の青年は自己に関する関心はあるものの、それは自他を傷つける可能性があるので表出しないのではないだろうか。

本研究で青年期の対人葛藤場面における CS・SS や自己関係づけの関連が示唆された。事例では、A は友人関係が自己に与える影響を、B は自己が友人関係に与える影響を示していたと考える。今後も友人関係のみならず、自己から捉えた友人関係の研究など、更なる検討が望まれる。

文献

- 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 藤井恭子 2004 青年期の友人関係における心理的距離に関する研究動向と発達の意義 愛知大学教育実践センター紀要, 7, 279-288.
- 金子一史 1999 被害妄想的申請と他者意識及び自己意識との関連について 性格心理学研究, 8, 12-22.
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 437-480.
- 畠山寛 2003 青年期の友人関係のルールに関する研究 —親友と友人に関して— 鳥取短期大学研究紀要, 48, 49-57.
- 平井美佳 2000 問題解決場面における自己と他者との調整 教育心理学研究, 48, 462-472.
- 平井美佳 2005 自己—他者間の葛藤調整と心理的適応との関連 臨床発達心理学研究, 4, 55-65.
- 保坂一己 1993 中学・高校のスクールカウンセラーのあり方について—私立女子校での経験を振り返って— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, 65-76.
- 井上健治 1966 青年と人間関係—(1) 友人関係— 沢田慶輔(編) 青年心理学 東京大学出版会, 195-224.
- 桂広介 1975 青年心理学要論 金子書房.
- 岸良範 1989 大学生の対人関係 現代のエスプリ, 266, 94-102.
- 永田良昭 1989 仲間関係の変貌 教育心理, 37, 180-183.
- 西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅(編) 現代心理学叢書5 共立出版.
- 落合良行・竹中一平 2004 青年期の友人関係研究の展望 —1985年以降の研究を対象として— 筑波大学心理学研究, 28, 55-67.
- Ohbuchi, K., & Takahashi, Y. 1994 Cultural style of conflict management in Japanese and American: Passivity, convertness, and effective of strategies. *Journal of Applied Social Psychology*, 24, 1345-1366.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 小此木啓吾 1981 モラトリアム人間の時代 中央公論社.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きるものの意味— ナカニシヤ出版.
- 佐野・楨田 1995 最新心理テスト法入門 松原達哉編 日本文化科学社.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(Self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究,

55, 184-188.

谷冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, 45, 253-262.

丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 2000 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成 心理学研究, 71, 379-386.

山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究 —青年期から成人期にかけての発達の傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.

吉岡和子 2007 友人関係における“自己のあり方をめぐる葛藤”に関する研究 九州大学大学院人間環境学府, 8, 195-200.

資料

1-1.事例 A の SCT 結果

1. (あなた自身やあなたの友人関係についての) 未完成の文章を完成させてください。

Part 1

1. 私はよく人から優しすぎると言われる。
2. 私は自分のことよく分かっているようでよく分かっていない。
3. 争いは好きじゃない。
4. 友人に近づくことはあまり得意じゃないし、難しいと思う。
5. 私が知りたいことはいつも自分で知ろうとする (他人にあまり開かない)。
6. 友達という時の私も一つの自分だと思うけれども、一人でいる時の私とは少し違う。
7. 私が嫌いなのは他人にベタベタとして関係をもたれること。
8. 友人と意見が違った時に私は、大抵友人の意見を聞くけど、自分の意見もしっかり言いたいと思う。
9. 私の出来ないことは、他の誰かにはできるかもしれないことだ。
10. 外から見える自分は、内から見る自分とは違うと思う。
11. 私がひそかにいろんなことを考えている、ようであんまり考えていない。
12. 友人とケンカしたことってそんなにない。
13. ときどき私は一人でいるとイライラする。
14. 友人が内緒話をしているのを見るのは、昔は気になっていたけど、今はそんなに気にならない。
15. 私が心をひかれるのは大人っぽくて優しい人。
16. 私の不平はそんなにないかな、と思う。

Part 2

1. 私はよく 一人で悩むことが多い。
2. 私を不安にするのは 〆切だったり将来のことだったり誰かに迷惑をかけることだったり、「不安」がたくさん重なること。
3. 友人は私 のことどう思っているんだろう？ってそんなに考えたことなかったけど、少し気になるかも。あんまり気にしないけど。
4. 友人と離れることは そんなにさびしくない。
5. もし私が いなくても、世の中は動いていく。だからこそ、しっかり生きたい。
6. 一人でいる時の私 はけっこう自分に甘い。
7. 内にある自分 は、自分でもつかみあぐねるものだ。

8. 私が好きなのはギターで新しい曲が出来た瞬間、面白い本を読んでいる瞬間、新しいことを見つけた瞬間。
9. 私の気持としっかり向き合わなければならないと思う。
10. どうしても私は自分の気持ちを大切にしたい。
11. 友人とケンカしそうになった時は、仲良くない友達にだったらすぐに謝るけど、仲の良い友達だったら本気でケンカをしそう。
12. 私が羨ましいのは同性からも異性からも親われている人。
13. 友人が悪口を言っているのを聞くのは嫌い。
14. 私が忘れられないのは中3でケガをした時、いろんな人と交流したこと。

1-2.事例 A の TAT 結果

一枚の絵を見て、物語を作ってください。

物語：たぶん、この帽子をかぶっている男の子と、近くの男の子が話している状況。話しているというか、言い争い、意見が違っている。しましまの服を着ている男の子が意見を持って強く言っているというよりは、背中（の服）を持っている男の子の方が不満を持っていて、しましまの方に言ってくれよと言っている。表情を見ていると、しましまは普通に喋っている。（しましまの）後ろにいる男の子は不満そうな表情でしましまの服を着た男の子に「言ってくれ」と言っている。帽子をかぶった男の子は、表情から見ると、怒っているより、今なんでこれを言われているのか？と思っているけど、言われたことを受け止めている。女の子が 2 人いる。左の女の子は様子を見ている。話を聞いている。真ん中の女の子は腰に手を当ててどうどうとしていて、頼まれていないけど仲裁とかする女の子。話がひと段落すると、「私はこう思う」というタイプ。左の女の子は特にそういうことをしない。一番右の男の子は、彼は学校のテストとか成績がよい、頭の回転が速い。（5 人が話しているのを）眺めて自分なりに整理して、分析している。どういうことでこういうことが起こったのか、矛盾はないか考えている。でも自分から積極的にこの場を収めようとはしない。眺めているだけ。腰に手を当てている感じが落ち着いて見える。離れているのが外から眺めている感じ。《これからどうなっていくそう？》たぶん、しましまの男の子が言い終わって、帽子をかぶっている男の子が納得したとしても、背中にいる男の子が（帽子の子に）何か喋る。満足できなくて、自分の思いを喋る。自分の怒りにまかせて喋るから、カチンときて言い争いになって、しましまはどうしようってなる。左の女の子もどうしようってなるけど、でしゃばりが入ってきて「どっちも悪い」ってなる。お姉ちゃんの役で、その場を丸く収める。収まればいいけど、たとえば外から見ている男の子と（でしゃばりが）仲良かったら、でしゃばりがその男の子に「どう思う？」って感想聞いて、そうすると鋭い意見を言って、帽子はそうりゃそうだとなって納得。最終的に、どっちも悪い

ってなってどっちも謝る。帽子もよく分かんないけど謝る。(帽子は) 全うだけど、正しいゆえに後ろの子にとってムカつく、いい気になっているってひがんでる。でも拗れるよりこの場は収まる。帽子は変わらないってか、ダメージを受けていないけど、後ろ(の男の子)は思い切って(帽子に)言ってみたけど、悪いことに気付いて大事にはしないで、あとで悪口を言いながらも過ごしていくのかなって。小学校・中学校の話みたい。

帽子はもしかしたら、関係ない子なのかも。他の 5 人が遊んでて、帽子は新聞配達とかしてるとか。帽子だけなんか雰囲気違うから。この子たちの縄張りに知らず知らずに通って、イチャモンつけられた。一番右にいる男は帽子の味方じゃないけど、こいつらが言っていることはむちゃくちゃだなて、客観的に見ている。でも問題解決のために、真実を言おうと自分からは動かない。でしゃばりが、どちらも悪いってしてく。でしゃばりは誰が悪いとかじゃないくて、うまくまとめることが大事だと思っているから、そうする。

2-1.事例 B の SCT 結果

1. (あなた自身やあなたの友人関係についての) 未完成の文章を完成させてください。

Part 1

1. 私はよく人から優しい、穏やかであると言われる。
2. 私は自分のことについて、ときどきわからなくなる。しかし、わかろうとして、自分自身に問いかけることがたまにある。
3. 争いはキライである。なるべく避けたい。
4. 友人に近づくことは少しためらいがある。適度な距離をたもっていたい。
5. 私が知りたいことは自分の存在意義についてである。
6. 友達という時の私は、なるべく相手を尊重するように心がけている。
7. 私が嫌いなのは他人を傷つけることである。
8. 友人と意見が違った時に私の方が友人の意見にしたがう。
9. 私の出来ないことは、他人の協力をお願いする。
10. 外から見える自分を、けっこう気にしてしまう。
11. 私がひそかに努力していることは、あまり周りの人は知らない。しかし知られなくてよい。
12. 友人とケンカしたときは、すぐにあやまる。
13. ときどき私はもどかしいような気持になる。
14. 友人が内緒話をしているのを見ると、いい気持ちはしない。
15. 私が心をひかれるのは、美しいもの、きれいなもの、優しい人である。
16. 私の不平は、世の中に、他人への迷惑を考えない人が多いことだ。

Part2

1. 私はよく精神的なつかれを感じる。
2. 私を不安にするのは、自分のまわりの優しい人たちの機嫌がよくない時である。
3. 友人は私とは近づきすぎず離れすぎず、調度よい関係であると思う。
4. 友人と離れることはあまり辛くない。
5. もし私が死んでも、今まで幸せな人生を送れたので、あまり悲しくはない。
6. 一人でいる時の私は、自分の時間を大切にしている。
7. 内にある自分に、ときどき戸惑うことがある。
8. 私が好きなのは自分にとって良い刺激をもたらしてくれる経験である。
9. 私の気持ちは、私にしかわからない。
10. どうしても私は自己中心的な考えの人間を許すことはできない。

11. 友人とケンカしそうになったらら、冷静になって考え、ケンカを避ける。
12. 私が羨ましいのは社交的で明るい人である。
13. 友人が悪口を言っているのを聞くと、注意したくなるが、できないので、そのまま聞
く。
14. 私が忘れられないのは、過去に大切な人を傷つけてしまったことである。

2-2. 事例 B の TAT 結果

2. 一枚の絵を見て、物語を作ってください。

物語：う～ん・・・はい。・・・えっと・・・。まず、話し合いをしているような・・・子ども、つか学生が5人くらい、5人いて、それでちょっと離れた所で少年がそれを見ているんですね。で、その話し合いをしているような5人は、この3人の左のグループと、2人の右のグループはケンカか何か、ちょっと対立しているような・・・状況にあって、それで、・・・そうですね。この離れて1人見ている右側の少年は、あんまりきっとこの5人とそんなに、あんまり深いかわりではないから、ちょっと距離を置いて立っているのかなあ～って思います。んっと、第3者、ですね。こっちの5人は当事者で、自分あんまり口出さなくてもいいのか、それとも今は様子を見ようということで、今は端にいるんだと思います。そうですね・・・結末はみんな仲直りするんじゃないかと思います。
絵を見て、人物の表情を見たとき、えっと、左側の女の子はきっとみんなの話を聞いて、あ、（左の）女の子と真ん中の女の子も今みんなの話を聞いている段階だと思うんですね。それで、後でまた自分の意見を言って、この・・・話し合いをしている男の子たち同士は、あの、自分の意見を主張しているんですよ。相手の話よりも自分の話をしている。でも女の子たちは客観的に全体をみて、判断するような気がします。はい・・・はい・・・。
たぶんみんなまた仲直りして遊ぶんだと思います。

—